広島大学　高等教育研究開発センター　大学論集
第 56 集（2023年度）2023年 7 月発行：1－50

大学研究者の履歴書

― 一教育社会学者の形成過程の回顧 ―

有　本　　章

大学研究者の履歴書

― 一教育社会学者の形成過程の回顧 ―

有　本　　章*

はじめに

かつて私が第10代センター長の時代に「大学研究者の履歴書」という企画を実施したが，その際にお願いした構成は，①生い立ち（大学入学まで），②「高等教育」との出会い（大学・大学院時代）③これまでの研究生活（就職後〜現在），④若い高等教育研究者への期待，であったので，今回は留学時代を挿入した以外はその線に沿うことにしている。

第1回　生い立ち（大学入学まで）

人生を回顧してみると，宿命，運命，使命が問われる。宿命とは自分の力では変更できない不可抗力の人生を意味するから，その定めに従属するしかない。宿命を自力で変革すると運命に変じる。私の場合，農業に従事する宿命のもとに生まれたのを偶然の巡り合わせを生かして自力で変革した結果，大学へ入学し，またしても偶然の巡り合わせを生かして教育社会学を専攻し，高等教育を一生涯研究することになった経緯があると言わねばならない。この歯車が何処かで狂っていれば，現状までの足取りは掴めないだろうし，その意味では今更ながら人生不可解と言わざるを得ない。

私は太平洋戦争の勃発した1941年12月8日の直前の10月26日に広島市の真ん中辺の中区新川場町（現在は廃止された町名）で誕生し，広島市が被爆した1945年（昭和20年8月6日）には3歳10カ月であった。当時は府中町茂陰（府中町は周囲を広島市に囲まれた，安芸郡の飛び地で爆心地から4km）に在住していて，当時はラジオで空襲警報が発令されたのを聞くと一家で近くの防空壕へ避難したのをおぼろながら記憶している。原爆投下の瞬間では，閃光（ピカドン）一過の爆風が玄関の扉を吹き飛ばして裏口（勝手口）をも瞬時に突破した。その凄まじさを後日に母から聞いた覚えがある。赤子であった妹の髪の毛は全部抜けて，後に白血病を患ったのは痛ましい限りである。家族は後に誕生した弟以外は被爆して被爆健康手帳を交付されたが私は交付されていない（二日前に田舎へ疎開したと聞いている）。被爆した多くの人々には惨憺たる状況が出現していた一方で，原爆投下で今後70年間は草木も生えない荒地となるとまことしやかに流言蜚語が飛び交った当時では，どさくさに紛れて土地を縄で囲んで自分のテリトリーを勝手に捏造して後に裕福な生活をした人々も例外的に存在したと側聞したから，それだけでも尋常ならざる世界が出現したのだと察知で

＊広島大学名誉教授・くらしき作陽大学名誉教授・兵庫大学名誉教授

きる。当時は驚天動地の事変が起きて多くの人々の人生を容赦なく奪ったのである。普通の人々はもはや広島市内に住めぬと観念して他の場所へ移転するか，田舎に疎開するかなど以外に方法がなかった。そこで両親は転職して父の郷里である県北の高田郡船佐村という田舎で（20軒程度の開拓団に入植して）農業をほぼ裸一貫から開始したため，その子供も否応なしに苦節の時代を過ごす羽目になるしかなかった。格差社会の上層・中層・下層の社会成層に位置付けると下層のしかも「下の上」と「下の下」に位置付けると「下の下」のどん底から我が一家の生活はゼロ発信したのは間違いない。寒暑を凌ぐ家屋はあったが，電気はほぼ「蛍送電」の時代で，あってもなきが如くであったし，月夜では外の方が明るい位で，そこで夜なべ（草履作りなど）をしたほどである。私がぼんやり知る限りでは衣食住のすべてに困窮している生活の中で，母が以前の生活を通して貯めたなけなしの着物類を売って家族の糊口を凌いでいたのは窮余の一策を示す光景であったのは確かであるが，要するにそれは自分の目で観察した「売り食い」の有様の一端に過ぎない。

思い出したくない当時だが小学生の頃は貧困に纏わる思い出が少なくないのも確かである。小学1年生の集合写真では母が自分の服を素材にして作った「簡単服」を着ていたし，もう少し高学年頃には靴もないので藁で自分自身の草履を手作りして履いていた。子供の弁当は米・麦・芋・稗・弁当無しの5層ほどに分類でき多様化していたけれども，弁当には階層差が見事に刻印されていた。既成農家が多い農村地帯の近隣には分限者クラスも少なからず存在し，その階層の子供は毎日米の弁当を持参していた。私達の場合は米の飯は高根の花で手が届かず，せいぜい芋の飯であったから，子供心に羨ましさと恥ずかしさの混在したコンプレックスを経験したばかりか，なぜ貧乏な家に生まれたのかを恨み，自分の家庭が貧乏なのをついつい卑下する気持ちに苛まれたのがトラウマとなって未だに記憶の片隅にとどまっている。後に脱脂粉乳の給食が始まりどの子供も一律に同じそれを飲んだ時には安堵した記憶がある。想い出したくないが脳裏に焼き付いているので想い出せることがある。朝礼中に目の前が急に真っ暗になって立っていられなくなる，立ち眩みに何度か陥ったのは，経験のない人には想像できかねるだろう。今にして想えばおそらく栄養失調の症状であったはずである。他に想い出すのは，高学年では栽培した西瓜を売り歩く手伝いをした話である。1里離れた地区（野部）に西瓜を配達したのを鮮明に覚えているのは，小高い丘陵の一番上に位置していたK邸宅まで急な坂道続きの遠い道程を重い荷物を背負って運んだせいである。籠（「なばほご」と称した）の中に子供には重い1貫目以上の大きな西瓜を入れて背負って行ったので，紐が肩に食い込んで痛かった。物理的痛さもさることながら，本当の痛みは他所の子供がしないこの種の仕事をすることの気恥ずかしさと関係したコンプレックスというか何か精神的なものであったろう。開墾，牛を使った田植えの準備，田植えとその草取り，稲刈りやハデ掛け，脱穀，乳牛の乳しぼり，タバコの葉もぎや乾燥，等々をはじめ他にも種々の仕事がぞろぞろと思い出されるが長くなるので割愛し他の機会に補筆したい。

さて，日本が太平洋戦争という無謀極まる戦争を始めていなければ，善良な市民というか庶民に年端の行かない子供も巻き込んでかかる犠牲が強いられる事態は惹起されなかったのは無論であろうから，その意味では，太平洋戦争を私が誕生した年に始めた張本人の大人達が恨めしいと思った。特に当時の首相は重い責任から逃げられまい。その点，東條英機なる人物は，物心がついた頃

から恨み骨髄に徹するほど嫌悪した人物の首謀格である。彼を推挙した木戸幸一（内務大臣，天皇の侍従）が後に，東條が戦争に異常に熱心であったのは自分が戦功を上げて公・侯・伯・子・男の爵位を擁した華族になることを希望していたからであると証言している事実があるから，誰しも怒り心頭に発するのは当然至極であるのではないか。彼自身の出世のために国民を犠牲にするという飽くなき欲望（野望）が諸悪の根源であるのは当然である。それに加え，彼に対して保身や出世欲が昂じて付和雷同した要人達が総動員されて共謀を重ねた結果，軍隊の軍人や兵隊達や原爆で被爆死した市民などの犠牲者は何百万（250〜300万人）に上るのをはじめ，その後被爆して原爆症に苛まれた人々，路頭に迷った人々，さらに私達家族のように一夜にして筆舌に尽くし難い苦難を余儀なくされた人々など夥しい数の犠牲者を輩出したのである。

農業を開始した両親は当然ながらその艱難辛苦の所産をあたら無にせずに子孫が継続することを強く望んでいた。呉造船所で技師の職にあった父親，広島日赤で看護婦（看護師）の職にあった母は，せっかくの天職をやむなく放棄して手に鍬をもちかえて必死に原野を開墾して田畑を造成した逆境の日々がそう言わせたのであるから無理もないし，子供心にも以心伝心や直言によってその点はよく伝わりもし理解もしていた。加えて，長男が家を継ぐ風習があった田舎では，私に有無を言わせず家督を継ぐべく農業従事のための特訓を施したのは，無論そのためであるし，中学まではそのことを前提とした「予期的社会化」の路線を辿るしかなかったのは当然の成り行きであった。ただ，その頃から体力的には農業向きではないと自覚し始めたのは確かであって，中学校では両親も了承した野球部入部でもって放課後の時間をそれに費やして体力の増強や自彊に注力した。しかしその種の心配は杞憂に終わる機会が到来した。中学と高校でA＆A先生に巡り合わせた機会を潮に人生が一変させられたからである。人間の一生は，人によって同一ではなく区々であるが，概して誕生から幼児，少年，青年，成人，死去というライフサイクルを辿るかもしれないし，また保育園，幼稚園，小学校，中学校，高校，大学，大学院などの学校へ入学することになるかもしれない。私の場合はこの中の少年期と青年期，あるいは中学生と高校生の時期の役割において偶然出会った「意味ある他者」あるいは「触媒」や「伯楽」の偉大なる威力によって変更させられることになったのである。

中学3年生の時点で，A先生（浅原晃）から三次高校へ進学せよと半ば命令口調による助言を頂戴した。小学校の児童会長，中学校の生徒会長，郡部中学生代表者会議の議長といった田舎の学校では多少目立つ存在であったかも知れない私に対して，先生からのたっての助言があったのだから有難い話であった。そうした事情なので，県北地域の界隈では，アララギ派の歌人中村憲吉や『出家とその弟子』の倉田百三の母校として昔から「三中」「三高」と呼ばれ名代の学校であったこともあり，できれば進学したいという自分自身の幼少からの密かな思いもあった。結局は助言通りに事が進んだ。前年に三次と式敷の間に三江南線が開通したのは，私の進学にとって追い風になったばかりか，当時は将来廃止されるとは夢にも思えないほど沿線住民から熱狂的に迎えられて出発した路線である。その後，式敷から江津までの三江北線が開通しさらに三次から江津までの三江線が全通した。しかし過疎化が急激に進行した，開通後65年経過した最近では赤字路線と化した全線は，地域の人々に惜しまれながら敢え無く廃止（2019年）されたのである。その事実を想起すれ

ば，もし開通がなかりせば最寄りの吉田高校（毛利元就の郡山城［最初の拠点］の近くに所在）へ親からの従来的風向きが変われば進学したはずであるし，そうでなければ農業に従事したのに違いない。その場合は現在の私が研究者として無事存在しているとは逆立ちしても想像し難い。

約10％は越境入学が認められる時代であった当時では，合格者にはそのような地区外からの入学者が一定数見られた。その種の制度を敷いていた三次高校に入学したら入学試験の成績を勘案して決めたらしく，私は新学期早々から進学コースの副級長を仰せつけられた。当時は遠方からの通学と学費が行く手に立ちはだかったけれども，成績と貧乏が両々相俟って獲得した奨学金が学費を補い，3年生時には遠距離通学を気の毒がった先生から，高校3年生が中学3年生を教えるのは当時は珍しかったが，中学3年生を教えるという「家庭教師付き下宿」の斡旋を受けた。その結果，高校3年間の通学は一日も休まず皆勤であった。ついでに付け加えると，切り詰める生活習慣は高校時から始まり，大学は修士課程まではすべて学寮生活，奨学金，アルバイト（家庭教師，学校講師等）などに依存した。通学時間は，学寮では縮小したが，高校では自転車，電車，徒歩を媒介に片道約1時間半費やした。多量の積雪に見舞われる冬場は閉口する。私が通学した頃は長い長靴を履かねばならぬほど何故か積雪が多かった。バスや車も何日も不通となるが故に，通常は下り坂の朝20分間，上り坂の夕方40分間を自転車に乗るのをやむなく断念して，その分は朝夕徒歩1時間（朝は父が途中まで雪かきをしてくれた暗い道を長靴を履き懐中電灯をもって朝5時半に出発）に変更したために合計では学校まで片道約2時間を費やした。不思議なものでかくも時間をかけて通学する毎日ではあったものの，農作業ほどそれを苦にしなかったし自分には農業よりも勉強が向いていると内心では思った。実際，大学に入学した1960年では，全国的に18歳人口の進学率は10％程度であったし，私の田舎からは殆ど進学していない状態であったから，上級学校への進学にこの程度の難儀が伴うのは当然だと思っていた。

ところで同じく越境入学組で級長に任じられたＴ君（辰川省二）は，今流に言えばギフテッドに間違いないほど優秀な人物であって，入学後頻繁に行われた全国模試では常に上位にランクされていた。私が彼を凌いだのは普通科生も必修科目に指定されていた商業簿記を履修して，年度末に日本商工会議所検定3級に満点で合格したぐらいである。この科目は教え方がよかったのか，別に勉強しなくても日頃から頭に入る楽勝科目であったのが幸いし全受験者の中で唯一人満点を取ったのである。他には中学時代に軟式野球部のレギュラー選手として技術を磨いたお蔭が幸いして彼を凌いだ野球とか，クラスを代表して選手として出場した校内駅伝とかしか記憶がない。彼はその後卒業時に東大へ進学し順風満帆の人生を歩みつつあるとわれわれは遠くから眺めていた。ただ2年生の時点で失踪して不帰の人になったのは，当時としては「事件」であったし，北朝鮮に拉致されたのではないかという噂が立ったものの行方が杳として知れず仕舞いに終わり，10年後にとことん手を尽くした親御さんも諦めて葬式を挙行したと側聞した。人生は不可解だと痛感した記憶がいまでも蘇る。

入学時の担任であった広島文理科大学の最後の卒業生（昭和28年卒業）であったＡ先生（阿川静明）は，「自分の後継者がいない」との理由で広島大学（以下，広大）への進学を熱心に勧めた。「大学教授は好きなことを研究して，好きなことを教えて，自由に過ごせる自由業である。」と

いった意味の夢のような話を聞かされた記憶がある。それもそうかと別世界の話と思いながら敬聴した。ご当人は家庭の事情で大学教授になる夢は絶たれたらしく，私にその夢を託されたようであった。しかし私は，3年生時に国家公務員初級職試験（郵政職）に合格したため高卒で就職予定と決めていたし，両親も地元の郵便局へ勤務して農業を継ぐことを判で押したように期待していた。他方，先生からは「もし合格した暁には両親を説得するからぜひ受験するように」と強く口説かれて両者の間で板挟みになったものの，それ程推薦されるには自分自身には何か取り柄というか秘めた力があるのではないかと半信半疑になりつつ多少自信をもって決断して結局，広島市内まで一人で受験に行き，合格しかないという切羽詰まった気持ちはなく比較的気楽に受験し，合格発表の時にも現場へは行かず，ラジオ中国のラジオ放送を聞いたら受験番号「6番」の合格を報じたので，まぐれにも合格したのを知ることとなった。親不孝と知りながら入学を果たしたのである。

農業に就く規定路線の「宿命」を自力打破の末に進学した以上，宿命から「運命」への転換を果たしたことを意味するに違いない。入学式の集合写真では，丸坊主，学生服，ズックのいでたちであったから，田舎からのポット出といった自分ながら冴えない風貌だと思った。高校の先生に口説かれ進学したものの，入学時では当時雲の上の存在であった大学教授への就職は夢のまた夢の話なので教員免許を取得して高校教員への就職を考えていたのだと思う。しかし，先生たちは，歓送迎会などでは何かと大学の伝統を唱え，誇りと自信を持つよう私たちを薫陶し鼓舞した。しかも学校教員よりも大学教員の養成が主流であった文理科大学そのものではないとしても，そのれっきとした血統を引く末裔校では，高校教員免許のカリキュラムは傍系に位置している傍ら，大学教員養成へ接続するカリキュラムが中心を占めたから，単位履修を重ねると必然的に大学教員の有資格者となる公算が強かったと言ってよかろう。特に大学院にはその傾向が強かった。したがって，傍系のコースの教員免許取得には，中学や高校向け教員養成課程の授業を履修したうえで免許取得をする必要があったことから，副免の英語に関係した授業は文学部で受講して所定の単位を履修したのは自然の成り行きと言ってよかろう。英語免許は，修士課程学生の時に市内の私立高校で非常勤教員職をして糊口を凌ぐために活用できたのと，英語会話を多少始めていたのが新渡戸フェローの外国留学試験時に英語会話に役立ったぐらいで，所期の目的からは見事にずれてしまったと言わざるを得ない。

第2回　「高等教育」との出会い

（1）大学時代

標題では最初の企画を生かして「高等教育」としているが，拙稿では大学研究や高等教育研究あるいは大学研究者や高等教育研究者の概念を使用する場合が多い点を最初に断っておきたい。自分が結果的に一生涯邁進することになった「高等教育研究者」の仕事に関しては，入学後に辿った進路を通して初めて正念場に直面し，使命＝天職を自覚するに至る。決定的瞬間が卒業論文を書き始めた3年生の時期となるのは，そこでは誰を指導教官に選ぶかが問われ，実際に決めたのであるから，そこに決定的瞬間を云々する鍵があったと言わねばならないわけである。ちょうど入学した

1960年は「60年安保」の真最中であったために，キャンパス・ターモイルがピークに到達したこともあって，学生は入学早々から教室の授業よりも市内に出てデモ行進に参加する方が多いほどの日課をこなしていた。巡り合わせとはいえ，何故かかる事態が勃発したかに関心を持ったばかりか，大学のことを俎上に載せて研究したいと痛感したのは確かである。学生運動に関しては，のちに論考を3本ほど書いた。また当時はまだ「四当五落」の時代の真っ只中であったため，受験地獄が跋扈する中で自殺者が出ていたし，なぜ試験地獄が生まれたのか，それがない国と言われた米国との比較研究が必要ではないか，その結果を踏まえて日本の試験地獄の改善を図る必要があるのではないか，とわれながら真剣に考え始めた次第である。

幸いなことに，当時の広大には大学研究の錚々たる専門家が驚くなかれ3人も雁首をそろえて存在したのであるから，有得ないことが起きていた。大学研究が未発達の砂漠のような時代であった当時としては稀有な現象というほかないが，言ってみればさながら「大学研究のメッカ」が存在したのであったし，そこに入学したのは幸運というほかない。当時では大学教授は森羅万象何でも研究するにもかかわらず，何故か大学研究はタブー視され「自分の事と大学の事は研究しない」と揶揄される時代であったから，大学を研究する人は，名立たる「変人」と世間からよりもむしろ大学内から言われたわけである。中にはこの種の新人種のシンパを自称する大学人は当時でも多少はあったとしても，大方の大学人は，自分の大学の事を根掘り葉掘り研究して自分達の悪弊を暴き出す不届き極まる人種だと横目に見て，こうした自分達にとって都合の悪いことを解明する研究者を敬遠し，疎んじ，厭う体質が陰に陽に作用して，変人，奇人なるレッテルを貼っていたのである。その意味では当時はヘイトの時代であったのに対して，現今ではそのような人々は変人，奇人，異星人であるどころかむしろ昏迷する大学を救済するために尽力している，さしずめ奇特かつ有難い人々であるし，大学研究でメシを食っているプロの研究者も皆無どころか頗る多数を数えることに思いを致せば，この半世紀間に雲泥の差が生じたのは否めない。

そうした大学教職員ギャップの巣くう未開時代にあるにもかかわらず，広大には名誉あることに3人もの変人が収斂していたのは，どういう風の吹き回しかいささか不可思議であるとしても，全員が文理大卒業生であった事実を知るにつけ，文理大の底力が遺憾なく発揮された結果に違いないと合点する。すなわち，ドイツ大学の研究者の皇至道，中世大学の研究者の横尾壮英，大学教授市場の研究者の新堀通也が揃いもそろって東千田町のキャンパス内に居合わせたのである。この中で皇は学長を務めた年輩者で且つ教授であったが，教育原理の授業では，ギリシャ時代の教育に関して他の授業では聞けない学識を披歴したこと，後に『大学制度の研究』（1955年）の著書を拝読して影響を受けたことなどを思い出す。また，半世紀以上前に卒業式の訓示を拝聴したのを今でも記憶している。それは「故郷の滋賀県の伊吹山は富士山には遥かに及ばない小さな山だが魅力的な山なので自分はかねがね誇りにしているのであり，伊吹山と同様に小さくても地域から仰ぎ見られるほど魅力のある山ならず人材になってほしい」という趣旨の訓示であった。1964年の訓示を今も覚えているのは感銘を受けたのであろうし，その点では学長の訓示が学生に与える影響は偉大だと今更ながら思わざるを得ない。この時のことを想起して，のちに学長で同様の訓辞を述べる機会に卒業式と入学式の四回ほど遭遇した時には，学生の琴線に触れるべく自分なりに内容を熟慮して原稿

を準備することを期して，あれこれ推敲したのを覚えている。

イタリア留学から帰国した若手研究者の横尾（当時は助教授）は，スライドを使用してヨーロッパの大学を歴訪した秘話を披歴し，その手法も内容も魅力的であった。後日出版されたラシュドールの『大学の起源』（上・中・下，1966〜68年）は，夏季には吉和の別荘に5年間ほど立て籠って集中的に訳業を完成した如く，われわれを大学研究へ誘う上で大きな刺激となった大著（翻訳）を世に送ったのである。出版時に前扉に「festina lente」（ゆっくり急げ）とサインしてもらった言葉は含蓄がある名言であり，時々反芻することになった座右の銘である。先生の著作は例えば『大学の誕生と変貌―ヨーロッパ大学史断章』（1999年，東信堂）の如く，大学を過去・現在・未来のスパンの中に置いて，縦糸から紡ぐ手法の歴史学的方法を駆使して興味を喚起した。現在に焦点を合わせて研究する教育社会学的方法を学修する際にも，同様に横糸から紡ぐ比較学的方法とともに興味を喚起せずにはおかない。その点，院生の頃には皇至道，横尾壮英といった広大系の学者の手法に影響を受けたのを嚆矢に，比較的早い時期から「大学史研究会」へ入会（1967年）したご利益のお蔭でもって，麻生誠，寺﨑昌男，潮木守一，天野郁夫といった東大系の学者の手法からも内々では影響を受け始めたのを覚えている。

米国のシカゴ大学からフルブライト交換教授を終えて帰国したばかりの若手研究者の新堀（当時は助教授）は，授業は英語のレジュメを使用して行い，やはり頗る刺激的であったし，新しい教育社会学を構築する意気込みが強く窺われる内容であったのを今でも昨日のように髣髴と想起するから，インパクトが強かったのである。VOA（Voice of America）のテープを聞いて議論をする方式であった3年生の時の授業では，受講生が揃いも揃ってヒアリングが苦手で，中身の議論をするまでの進捗状態には至らずに終わり，結局はテキストを使う嵌めになったのは如何ともしがたい。教員と学生のレベルが月とスッポンほど違う結果生じたというほかない，この時の授業は脳裏を離れずに60年経た今日でもある種のトラウマを残していると言ってよかろう。しかし結局は最初の直感どおり新堀を指導教官に選ぶことになった。

上で述べたごとく，入学試験に関心を抱いたために，3年生時から卒論の指導を受けて，米国の入学試験制度を取り上げて，日本の入試センターの源流につながる，既に当時古い歴史を刻んでいたアメリカの CEEB（College Entrance Examination Board）を対象にして，『アメリカの大学入試制度の研究―CEEB を中心にして』という研究を行った。日本の偏差値を重視する方式とは異なる，米国の適性検査を重視する方式は，両国間に入試に関する価値観の越えがたい垣根が存在するのをはじめ，学生観にやはり価値観の距離が存在し，さらには大学教育によって育成する人材観の相違が存在する。この認識はその後の大学観，大学教授職観，国家観などの日米比較を継続的に研究することの必要性を提起したのに加え，社会格差や大学格差には両国間に類似点が多く見られると同時に相違点もまた多いことを発見した意義が少なくなかった。卒論において原書を参照した中で階層問題を分析した R.J. ハビガースト『American Higher Education in the 1960'』（1960），B.S. ホリングスヘッド『Who should go to College』（1953）などから刺激を受けた。社会格差やそのコロラリーの大学格差の研究をライフワークの研究に色濃く内包しているのは，この卒論の原点から出発したと言ってよかろう。

後知恵的に言えば，この時点で得た高等教育研究に対する教育社会学からのアプローチの問題意識は，その後の研究生活に陰に陽に影響を及ぼし続けることになる，いわば学問に対する初心形成であったし，世阿弥の「初心忘れるべからず」の言葉を引用すると何かその種の気持ちを体験したのである。大学や高等教育研究のレディネスがいまだタブララサ＝白紙状態にあるのに対して，その後の教育社会学研究を左右する「刷り込み」を行ったのである。もしこの点を「問題意識形成」と称するならば，私の指導教官の新堀にはすでに大学入試研究を誘う著書『大学進学の問題』（1951年）があったから，それに触発されたのも忘れ難い確かな事実である。かくして私も向こう見ずというか，世間知らずというか，目出度くというか，不幸にもというか，名にし負う変人の仲間入りをさせて戴いたのである。

その時点から大学研究を始めて，今日までの60年間，同じ高等教育あるいは大学研究に飽きもせず一意専心邁進したのであるから，われながら感心している次第である。もし広大に入学しなかったら，もし3人の変人に邂逅する機会がなかったら，もし新堀のアメリカからの帰国がなかったら，今日まで60年間同じ研究を延々と続けるという路線（人生）にはならなかったと考えるのが自然だろう。それはそれとして，その間の人生では多数の研究者に出会ったことを通して高等教育研究を教育社会学からアプローチする路線を中軸に据え，大学史学や比較教育学とも結合を可能にする路線が定着したのは僥倖であったというほかない。誰か私の来し方行く末の軌跡を山の上からつらつら鳥瞰して，岡目八目的に診断したならば，こうした路線を辿らずに他の路線を選べばもっと素晴らしい人生が開けたと恐らく落胆するかもしれないけれども，私自身は万々歳とはいえないまでも自分なりに一生懸命に使命を追究したとの思いがある限り，それなりに満足な軌跡を描けたのであると思う。

（2）大学院時代

学部生時代に教育社会学の専門分野と出会い卒論を書き上げた経験は，学者人生へと接続するうえの関門通過に値したのか否かはいまだ自覚的ではなかった。ましてや高等教育研究に着手した限りではそれは高等教育研究者を形式的には自認した証拠となるにもかかわらず，当時は実質的にはその種の気持ちは毛頭なかったし，教育社会学者を心底から自認したかと言えばそれも希薄であった。そのことを鑑みれば，学者として身を立てる意識が醸成されていたとは到底言えそうにないわけである。ただ，日本教育社会学会と日本教育学会の会員登録をしたのは，1964年の5月と10月であった点に注目すると，当時すでに「教育社会学者」や「教育学者」たらんとする潜在的な気概はおぼろに有していたのだと思われる。実際に研究者の端くれになったのは，「逸脱行動の社会学的研究」（1966年，中国四国教育学会『教育学研究紀要』第11巻）の発表時である。学会での論文および学会誌の発表の有無は研究者としての自立性や一本立ちの証明である以上，修士論文および学会誌の掲載はその一里塚として見落とせない。

修士課程時代は，2年間「逸脱行動の社会学的研究」に集中した点で，専門分野的には教育社会学の専門分野を基軸に社会病理や教育病理の研究に接続した一方で，いまだ大学論や大学教授職論への接続は不発に終わった段階と見做される。実際，卒論での大学論と博士課程での大学論へのそ

れぞれの取組みの間に挟まれた修士課程の2年間はマージナルな中途半端な状態に置かれた宙ぶらりんの時期だと言えなくはない。実際，この2年間が私の学問追究の観点からはいささか遊離して逸脱した時期であるのは，教育社会学講座の事情を反映した影響が色濃く影を落としている証拠である。悪く言えば講座の犠牲になった時期，よく言えば苦難に耐える時期といった表現が該当するだろう。前者の論点は，戦後に教育社会学講座が成立した時点から教授と助教授の組み見合わせは水と油に近い性格の機械的な寄り合い所帯であって，同じ教育社会学という学問の形成過程を踏んだ学者から生成していなかった点に問題が起因している。教授は新しい教育社会学講座の学問的発展を学論形成に一意専心するよりも，講座の保身と安泰を図ることに主たる関心を抱くのに対して，助教授は講座の学問的発展を学論の創造的形成によって形成せんとする強い野心を燃やす。水と油の両者の相違は歴然としていることに鑑みれば，当然ながら時間が経過するにつれて両者の対立が表面化するのは回避できない。その象徴的現象は，教授と助教授の研究室の間には相互に行き来できる通路があって，当初は開放されていたのに忽然と閉鎖されて行き来が不通となった点に見出される。また，助教授は教授と話すときに両手をズボンの中に突っ込んだまま話したので，教授は常々「挨拶ができない」とぼやいていたが，これは礼儀不足というよりも，教授を学問的に尊敬していないことのジェスチャー的な表現であったのでないか。このような状態が不断に生じている中では，学生も知らず知らずに対立の空気を吸わざるを得ないし，権力を付与されていない助教授は沈黙していても，教授は講座主任の名において権力を傘にきて，学問の力ではなく腕力的に力ずくで服従を強いる，という構造を意識してもおかしくない。その関係の中に学生が巻き込まれると主任の側から「坊主にくけりゃ袈裟までにくい」との力学が働くのに呼応して，学生が謂れのない被害をうける羽目になるのは無理からぬわけである。助教授の門下生となった私の場合は，それが下に述べるように修士課程，大教大就職，講座助教授人事，センター教授人事の時点にそれぞれ顕在的且つ潜在的に惹起されたものと把握できよう。

講座の主任教授は「助教授が指導教官になるのは罷りならぬ」との旧態依然の考えの持ち主であったから，学生は助教授を指導教官にするのは怪しからぬことであり，教授と助教授が二人体制でその役割を担うべきだという主張を頑なに拘泥して譲らない。実は，教授は全授研（全国授業研究会）の主宰者として学部生の私に目をつけ大学院でその門下になることを期待していた（らしかった）ので，助教授の門下になるのには反対であったらしい。その点，主任の門下に大人しく収まっていれば，何も波風は立たなかったろう。私は講座よりも学生の主体性を尊重して，専攻したい学問領域に造詣の深い指導者の門下になるのが，「学問の自由」の筋論だと考えていたし，この考えは修士課程でいったん抹消されかけたか少なくとも風前の灯と化したのを，博士課程で高等教育研究を名実共に復活させた時点で首尾よく継承される運びになった。

結局，本質的には筋論を通したが，皮相的には妥協の精神が「逸脱行動の研究」となった経緯があるし，選択したテーマは「高等教育研究」の本道から文字通り逸脱している点で実質的には苦渋の選択であったと言えよう。ただその過程を通して後に研究することになるマートンの「アノミー論」を見出したのは，不幸中の幸いであったのでもあり，その点では「人間万事塞翁が馬」と同様に人生の展開は幸福が不幸となり不幸が幸福となり糾える縄の如く時々刻々と変転し，なるように

なるのであって先行きは予測し難い。同時に「人生には無駄なことは何もない」と思われるし，見方によっては「転んでもただでは起きない」という根性がこの時期に多少なりとも涵養されたかもしれないと思うわけである。私の研究者的軌跡を直視すると，ある意味では学問研究の主流部分に自律性を発揮して運よく到達した側面もある反面，往々にして他律性が作用した側面もあるから，概して「マージナル・マン＝境界人」性を反映した軌跡を描いているところに特徴が見出されるのであり，そのことは道草を食ったが故にそれが短所であると同時に，横道にそれた最中に情熱を掻き立てるバネが作用したが故に長所になったのである。言ってみれば，すぐ諦めないで粘り強く頑固さを貫き通しつつ，周辺に身を置きながら中長期の先を見越した視座から「中心志向」を模索した，マージナル・マンの性格を我慢強く発揮したところに特徴が見出されるのであり，この時期に培った精神は一生涯にわたり高等教育研究の中の同様の主題を飽きもせず追究したアイデンティティ形成過程に接続しているであろう。

この時期の前後で「中心志向」を惹起する北極星の役割を果たした新堀は，加藤秀俊が助教授職から退職した時点でその後任に京大の比較教育学講座主任から白羽の矢を射られて引き抜きを図られたことが鮮明に思い出される。新堀は私にも苦慮中の胸の内をポロリと漏らしたほどであるから，京大をとるか広大をとるかと相当迷いに迷った挙句に広大残留を決断したに違いないと推量できる。その理由を憶測すると，①母校愛，②教育社会学愛，③門下生愛，などが輻輳的に作用したはずである。もし広大を辞職していたら後に残された私ども門下生は路頭に迷わないまでも，学問的支柱を瞬時に喪失してあてどなく彷徨する顛末を迎えたに違いないから，このことは今以って考えるだに恐ろしい。その意味で，仮に京大教授に転出していたらそこでは比較教育学講座を担当するのを当然のことながら余儀なくされるから，従来通り教育社会学の発展に貢献する熱意は必然的に殺がれるのは道理になるが故に比較教育学会は濡れ手で粟の摑み取りほど益すけれども教育社会学会が計り知れないほどの損失を招くのは必至であるはずである。何よりも門下生に与える打撃は痛烈であり，少なくとも私自身はその後の教育社会学者形成，あるいは高等教育研究者形成はあえなく頓挫するという窮地に追い込まれてしまい，学者生命を左右する存亡の危機に直面せざるを得なくなったのは明々白々である。この「事件」は辞退によって終止符を打ったお蔭でもって広大・学会・自分は波風が立たずに終わり三位一体的に幸運，否ご本人を含めると四位一体的に幸運であったという他ないのである。

蛇足ながらその後の経緯に多少触れると，辞退後に小林哲也助教授が実現してしばらくの間は新体制が続いた後に，同氏の教授昇任後になって私がその下で非常勤を務める巡り合わせとなり，さらに助教授人事では候補に推薦された経緯がある。私を含め3人が最終候補に残り結局，江原武一が選ばれる顛末となった。日本の大学には明治以来厳然と東大が尖塔に聳える大学格差が形成されているので，旧帝大人事においてそれ以外の格下の大学陣営から選考される事例は，系列校は別格としても，それ以外からは殆ど起きない硬直性や差別性が跋扈している。その点，新堀がノンと言わない限り選考されて然るべき状態までことが進展したのは，私の場合とは違って例外的にダントツの実力があったことのなせる業であろうと愚考する。日本の大学では「学閥」が明治時代以来根強く蔓延り，旧帝大から格下大学への「天下り人事」は頻繁に生じても，格下大学から旧帝大への

言葉は悪いが「成り上がり人事」つまり上昇移動人事は阻止される傾向が常識となっているのは誰しも否定できないだろう。その点，東大にしても京大にしても，教育学科に関する限りは，戦前の旧帝大時代には存在しなかったのに対して，文理科大学の伝統を継承している広大の教育学部教育学科には戦前以来の伝統と学風が連綿と存在するのは確かな事実である。その種の実績があっても旧帝大ではない以上，上昇移動人事は生じないのである。

新堀の恩師の世代は，長田新や稲富栄次郎まで遡及することからして，ある意味では東大や京大を凌駕する文理大の旧制風伝統がいまだ色濃く刻印された学風と化して今日まで脈々と息づいたままだと見做されてもおかしくあるまい。その意味では，当該人事の成立によって大学格差是正の敢行による旧弊打破がなされたと見てもあながち不思議ではあるまいし，荒唐無稽とは言えまい。付言すると，私の場合はその種の伝統や学風の継承が大学格差の是正まで至らなかったありふれた事例に過ぎないのであるから，何ら新味がない。しかし最近，東大に私の門下生の3人が教授に任用された人事こそは一味も二味も異なる未曽有の人事を意味しており，大学格差が漸く解消され始めたと言えなくはない事例そのものであるから，明治150年にして初めてタブーに風穴が開けられたばかりか，ある意味では漸く「奇跡」が起きたのである。

文理大の稲富から門下生の広大の新堀に継承し，その門下生のセンターの私に継承した学風＝学問的伝統がそのまた門下生を媒介に東大へと伝承され，さらにその教授達の門下生によって次の世代へと連綿と伝承される。学界＝学者の世界には恩師の「暗黙知＝ tacit knowledge」が秘伝的に弟子へ伝授されるという，「インビシブル・カレッジ＝見えざる大学」の真髄が機能する以上，えてして徒弟制度の閉鎖的体質に傾斜しやすい体質を孕みやすい欠陥があるのは否めないけれども，その限界を引きずるのではなく克服して，進取的な学風が成立して固有の学問発展に貢献するという長所を発揮するのはあながち否定できない側面である。それは個人間の秘伝の伝授であると同時に，制度的な発明発見の伝統の伝播方式である。図式的には，「文理大→広大→広大センター→東大→？」という系譜が成立する。東大卒のみの「身内」で人事を固める旧来の「インブリーディング＝学閥」は，東大→東大の再生産という悪循環に終始するばかりであって，私が『大学人の社会学』（1981年）の中で逸早く指摘したように，米国の大学が19世紀終わりからきっぱりと拒絶して来たインブリーディングの陋習の繰り返しにほかならないと言わねばならない。その意味では，学問の世界における「近親結婚」がタブー視されずに根を張り続け，それが明治以来150年の無為無策によって命脈を保持した空白期を経て，漸く外なる血を積極的に輸入する時点に到達したことによって，旧弊を乗り越えてアウトブリーディングへと革新されるメカニズムが作動し得る段階を迎えたのである。

話を戻して2年間の空白後に高等教育研究へ復帰した点に関して言えば，大学院博士課程の時点の1969年に発表した，「大学教授の経歴型の研究」（新堀と共同執筆，『社会学評論』所収）と『学閥』（新堀編，福村出版）は，復帰を不動のものとして画期的足跡を残す第一歩となったと言える。特に前者は私の教育社会学者として大学教授職研究を開始する処女作に匹敵する確かなモニュメントであると同時に学会への登竜門となったと見做されるものである。共著なのに先生からの一言一句の修正もなかったので，内容的に単著として全面的に責任を負う筋合いの著作であったのは

否めない。弟子の主体性を尊重して出来栄えに注文を付けず概して黙認する手法はこの時に限らず生涯一貫していたように思うのは，決して思い違いではないはずである。天才肌の人は，弟子は自由放任であっても，自分は常に新しい領域の開拓に全力を投入していたと端からは確信できたし，事実，機関銃の連射のごとく次々に新しい発見の新著が刊行されたし，何よりも驚くのは両手からはいつも汗がほとばしり出ていたのを観察したことである。複数の論文を並行させて創作し続け，複数の論文の構想を練り続けていたからこその汗かき現象であったはずである。それでも無口で沈思黙考の様子が多いのが日頃の風貌ではあったし，人によってはとっつきにくいとの印象を受けたかもしれない。ある時などは，「新堀が何日も無言なので心配ですが，大学では何か変わったことはないでしょうか」と心配顔の令夫人が大学へ訪ねてこられたことがある。それは学問探求に熱心なあまりの人（学者）が陥る現象であるとしても，ご当人の頭の中の暗黙知の世界ではわれわれ凡人の想像を絶することが起きている証拠である。端から見た限りの印象をアト-ランダムに拾うとその片鱗が窺われよう。例えば，国内外で学者としての知名度が高いこと，スパコンの如く頭の回転が速いこと，語学が堪能であること，速読が出来ること，論文を書く時にメモ書きから完成までの速度が速いこと，過去に書いた原稿用紙の裏に新しい原稿を書く節約家であること，外国人学者と対話中に書いたメモが要点を的確に示して相手を驚かすほどの才能があること，過日途中で英論文作成を中止した箇所から後日にタイプライターをすぐ打てること（喜多村の証言），短歌や詩作の才能があること，好き嫌いがはっきりしていて「癖」のある人を嫌うとともに対峙して舌鋒鋭く論駁すること，講座の葛藤解決に関して質問した時に即座に「老人は早く身罷る」との直言があったこと，等々のエピソードが思い浮かぶ。酒と煙草は強く，スポーツは特にしなくても風邪もひかないほど身体は頑強であること，といった点を思い合わせると，知徳体のいずれも並外れていて生まれながらの傑出した学者であったのであろうと思わざるを得ない。

新堀と最初に出会ったのは上述の時期であって彼が40歳，私が20歳の頃であったから，身近に共同研究に参加してご当人の動きを観察できたのは，その時期から博士課程を修了した時期の9年程度（20〜29歳）であり，その間は他の人々よりも身近に動静を知ることができたはずであるが，それ以外は遠くから眺めた程度である。修士課程の2年間は，他の箇所で触れたように，摩擦が生じた時期であった。先生は2年間，文部省の社会教育官として配置換えがなされて東京に在住された結果，不在になった研究室の留守番を仰せつかった。そのことを講座主任は自己の管理能力に抵触する行動だと捉えたらしく，「君たちは同じ穴の貉だ」と私（私達）を厳しく叱責したほどである。その後恩師の没した92歳までには，約50年の年月が経過した計算になると見做すと，私が私大で学長を務めていた70歳頃まで彼のアカデミック・キャリアを遠近から観察したことになるが，その中でこの種の至近距離から眺める体験をしたのは僅か数年間であった。しかし，近距離と遠距離の観察を含めて得られた感想は，終始一貫して貫いた生き様のすごさである。それは，教育社会学の発展に生涯を捧げる信念を貫き，某国立大学の学長を請われても辞退し，京大から招聘されても辞退するなど母校愛，学問愛，教育愛などに徹し，ひたすらに「生涯一研究者」の信念を邁進する姿勢を頑として崩さなかったことに尽きるのではないか。教育社会学者の探求心を貫き，新しい領域を開拓することに心血を注ぎ専念した結果，教育学や社会学の中の他の学問分野に先駆けて数々

の新領域の確立に成功し，誰しも無しえない未踏の業績の数々を樹立した功績は大いに讃えられて然るべきである。日本の教育社会学や高等教育研究者がいまだ注目されない時期に，例えばデビッド・リースマンの賞賛を得て米国の社会学誌（American Journal of Sociology，Sociology of Education など）に論文が次々掲載されて注目されるなどの国際的賞賛を得たのは，すなわち彼の偉大さを物語るバロメーターであるとともに試金石である。ミニ文化勲章の紫綬褒章受章や勲章の旭日中綬章などの受章はその一端を如実に示しているのでもある。彼ほどの業績があれば文化功労者や文化勲章受章者に選ばれるのは当然至極だと思われるにもかかわらず，実現しなかったのは，日本の勲章の水準が高いのか，それとも勲章を授与するレフェリーの鑑識眼の水準が低く節穴なのか，はたまた教育社会学の学問水準が例えば歴史学に比してあまりに低く格付けされて箸にも棒にもかからないのか，等々不詳であるとしても，国内外の実情を加味して身近に実績を知る者からすると誰しも釈然としないのではなかろうか。

それにしても，そのような学問生産性を矢継ぎ早に生産し続けるエネルギーが何処から湧出するのか不思議であると常日頃から思い知らされることが多かった。広島の原爆で被爆し，神戸淡路大震災で被災しても，九死に一生を得て不死鳥の如く羽ばたいて仕事に没頭した姿を知る限り秘められた不屈の精神に感服せざるを得ない。神戸一中の飛び級組であると仄聞したことからすれば，幼少から出色の才能の持ち主であるし，広大時代でも「三堀」ともてはやされた前歴があるぐらい傑出した人物であった。としても，頭の中がどういうカラクリになっているか暗黙知の世界を覗いてみて解剖的に窺い知ることは，身近にいた門下生であっても匙を投げざるを得ないことだし，ましてやそのような「怪物」の世界を乗り越えるのは誰しも不可能な話となろう。

新堀は留学時にキャプロー・マギーの著作『Academic Marketplace』（1958年）に刺激を受け，帰国後すぐ日本の同様の大々的な実証研究を電光石火のごとくたちまち手掛け，『日本の大学教授市場―学閥の研究』（1965年，東洋館）なる卓越した実証研究を行ったのは持ち前の仕事の速さを如実に示している。日本の学界で大学教授職を俎上に載せてそのキャリアを国際比較の篩にかけて検証し，しかも学閥にメスを入れた点では，本書は紛れもなく斯界における本邦随一の名著に値するし，その後の大学教授職研究の原点となったと言って過言ではあるまい。速さと言えば，広大の学生課長を務めた時期に，学生と団交中の合間にすでに書き古した原稿用紙の裏に原稿（『中央公論』に掲載）を書き（すぐには判読できないほどの書きなぐり調），秘書に清書させるためにそうした原稿を読みなれている私に判読を仰せつけられたことがある。この一件を見ても，仕事（論文執筆）が団交と同時並行的に進行していたことを示す証左である。

当該名著は，1965年の作品であるから，私が大学院生時の創作であるし，ちょうど創作中の後ろ姿を間近に観察していたはずであるにもかかわらず，ご当人が何を考えていたか「暗黙知」の所在地の脳内まで覗き込めないので皆目何も分からなかった。ただ他の共同研究者と日本の大学教授職のキャリアパターンをいまだ PC がない時代に電動計算機を使って詳細に統計分析する作業は，間近に観察する機会が多々あった。そのような作業と先生の暗黙知が見事にドッキングを起こした結晶が書物に上梓されて全国の読者へと見える化を果たしたのは間違いなく，同様の工程を踏んで私自身が関与した著作「大学教授職の経歴型の国際比較」や『学閥』（共に1969年）が誕生したわけ

である。大仕掛けの共同研究の成果であったこれらの著作が世間ではシンボリ・ファクトリー＝新堀工場とかシンボリ・グループとか噂されても，日の目を見る時期に門下生になって共同研究に参加して学問生産性への独特の空気を吸ったのは幸運であったばかりか，この時点に自分自身にとっては高等教育研究，とりわけ大学教授職研究の原点が形成されたことは論を俟たない。最近では，博論の刊行を急ぐあまり，院生との共同研究を忌避する傾向が全国的にままあるようだが，私の時代には博論と共同研究とは両立させるとの空気を吸っていた。それが妥当だとする常識を保持したことは，その後のアカデミック・キャリアに役立ったように思う。

第3回　留学時代

(1) イェール大学

1976年に，第1次新渡戸フェロー（正式には，「社会科学国際フェローシップ」）に選考されて，米国のイェール大学，独国のマックス・プランク教育研究所，英国のランカスター大学に客員研究員として留学して，「高等教育の国際比較研究」を主題にして2年間を過ごし，その間，各留学先で受け入れの教授から薫陶を受け，多くの研究者との交流を深めることができたのは，人生においてまたとない画期的出来事であったと言える。その意味で，送り出しの国際文化会館には恩義があるし，そのような35歳以下の若手フェローが100名に達するまで諸外国へ送り続ける壮大なプロジェクトが誕生しなければ，その後私が辿った軌跡も生まれなかったのは異論をはさむ余地がないだろう，と回想するにつけ感慨深い。

フェロー送り出し元である国際文化会館は，新渡戸稲造（1862-1933）の功績を讃える立場から彼が国際連盟の事務次長を務める中で遠大なる理念を掲げて文字通り東西の架橋を標榜した足跡を踏まえて，本プロジェクトを企画した。若手の社会科学者に対して外国の学問を輸入するだけに終始してきた日本の学界における悪しき旧弊を打破して，むしろ日本の学問生産性を諸外国へ積極的に輸出するための事業を本気で仕掛けたのであった。その点，新渡戸が「願わくはわれ太平洋の橋とならん」と心掛けた精神は，これら若手研究者が日本を代表して継承すべき使命が何かを定義する原点となったのである。彼の功績の素晴らしさは『武士道』の著作に具現しているし，若手研究者の道標となった。1971年に大阪教育大学に任用されて広島大学助手から講師として転出した私は，その5年後の助教授の時代（1976年）に国際文化会館の第一次新渡戸フェローに選考された5人（西部邁，井上俊，江頭憲治郎，平石直昭，高梨和鉱）とともに倍率10倍超の難関を突破して選考されて，2年間，客員研究員として上記大学等へ派遣され，「高等教育の国際比較研究」を主題に研鑽を積むことになった。

そのうち1年10カ月滞在したイェール大学の「社会・政策研究所」（Institution for Social and Policy Studies）では，バートン・クラークの薫陶を受けた。彼は当時世界一の実力を誇る教育社会学者であったし，数々の名著を世に送り出した高等教育研究の第一人者であったが，その研究グループ（Yale Higher Education Research Group）でのフェローとして研鑽できたのは，またとない僥倖というほかない。「社会・政策研究所」に滞在中に研究所論文「The Academic Structure in Japan: Institutional

Hierarchy and Academic Mobility」（1978，Higher Education Research Group Working Paper，No.27）を発表したのを踏まえて上梓したのを図らずもクラークの後述の著書『高等教育システム』に引用されている。彼から滞在中に出版された『Academic Power in Italy: Bureaucracy and Oligarchy in a National University System』（1977，University of Chicago Press.）にサインを付して献呈された時，左利きのサインがぎこちなく見えたのは，右利きの私から見た錯覚であったろう。彼の名著の数々はその左手から次々量産された賜物である限りぎこちないはずはないからである。帰国後になって出版された名著『The Higher Education System: Academic Organization in Cross-National Perspective』（1983，University of California Press）は，『高等教育システム―大学組織の比較社会学』（1994，東信堂）と題して翻訳した。世界の高等教育システムを種々の角度から国際比較する方法と枠組みを見事に証明した原著は，世界の大学組織が知識を主体にして発明発見，伝播，応用などの方法によって特色ある構造と機能を展開している実態を社会学的に検証して面目躍如たるところがある。そう認識した動機が翻訳を駆り立てた主たる理由である。ただ，この原書を院生といっしょに講読した際に難解だとの見解が大勢を占めたので，後日，UCLA にクラークを訪問したときにそれに言及したら，米国の院生も難解だと評しているとの反応が返ってきたのには驚いた。

それとは別に後になって『Places of Inquiry: Research and Advanced Education in Modern Universities』（1995，University of California Press）を『大学院教育の国際比較』（監訳，2002，玉川大学出版部）として邦訳した。本書は，クラークが再発見した，フンボルトの「R-T-S ネクサス論」の独英仏米日という五カ国での制度化を対象にした国際比較研究であり，なぜ他国を差しおいて米国が制度化に成功を収めて躍進したかを検証した点でも見逃せない先駆的書物として評価されてしかるべきである。大学院を対象にしているが，内容的には学部（学士課程）にも該当する内容であり，その点を敷衍すると，五カ国の中ではすでにその時点で米国のリードが揺るがせないと分析しているのは妥当であろう。

（2）マックス・プランク教育研究所

イェール大学に2年間滞在中に，西独（当時は統合前）のマックス・プランク教育研究所に社会学者ディートリッヒ・ゴールドシュミット所長から客員研究員として招聘されて1カ月間訪問した。当時助手であったウルリッヒ・タイヒラーはちょうどイェール大学に訪問中であったので，同じ飛行機で家族ともどもドイツへ向かったのが昨日のように思い出される。彼には令夫人ともども半世紀前から知り合って，生涯にわたって共同研究など交流を深めたが，ある時，日本人の令夫人のタイヒラー曜子と共にセンター客員教授として招聘したことがある。生前に著名な同時通訳者であった彼女に関しては，ちょうど私がオランダの大学で国際会議に出席していた時に起きた東日本大震災を通訳している映像が，世界へ配信されていたのを思い出す。ところで，滞在中にベルリン自由大学（旧ベルリン大学から分離してフンボルト大学とベルリン自由大学が誕生），新設のビーレフェルト大学，当時はボンに所在していた文部省などへインタビュー調査に出向いて，大いに刺激を受けた。ベルリン自由大学では，学長候補を大学で3名推薦して上申し，その中から文部大臣が1人を選任するというドイツ独特の学長選考方法に関して調査した。ちょうど大学の上申した候

補者が文部大臣から拒否されて他の教授が任命されたため，大学側が苦慮する事態に直面していた矢先に訪問したことも手伝って，いささか生臭い深刻な実情を知った。

西ドイツのベルリンは東ドイツの中に飛び地として所在した時代であるから，当時の首都のボンへ行くには，飛び地のベルリンから汽車に乗って東ドイツの中を走って西ドイツへと到着した。帰途はライン川を船で下ってフランクフルトまで行き飛行機で帰った。東ベルリンに行くには，ブランデンブルグ門のところへ入ってチャーリーポイントで車を乗り換えて入ったが西と東の風景の違いに驚いた。ボンに所在した文部省では，ハイジャック事件があった直後のため周囲に鉄条網が張り巡らされて，ものものしい雰囲気の中で高官に面会して面接調査に臨んだのを思い出す。当時の西ドイツは，大学の大衆化が進行した1960年代に大学教員を一挙に多数任用したことの反動が起こって，過剰になった世代の次世代の教員採用ができかねる苦境に直面していたのである。若手教員採用が不可能な状態に災いして生じた人材払底を解消するべく150人ほど優秀な人材を採用する新システムをまさに実施せんとする時期に訪問したのであるから，経緯を詳しく尋ねる絶好のチャンスが到来していたのである。各世代には4% 程度の優秀な人材が埋もれているのでそれをスポイルすると国家人材の損失になるのでなんとか回避したい，との哲学を高官から熱心に披歴された。ギフテッドは2% 程度と言われるから，それよりも範囲は広い概念である。新プランは，ノーベル賞受賞物理学者にちなんでハイゼンベルグ・プランと称されて，優秀な研究者を人選して好きな機関で5年間自由に研究を委ねる計画であったけれども，後に日本学術振興会の若手人材発掘のプランに影響を及ぼした政策である。

(3) ランカスター大学

ランカスター大学（1964年設立）は，やはり1カ月間訪問した英国のモアカンという避暑地に所在する新設大学であり，受け入れは社会史研究の泰斗ハロルド・パーキン教授であったもので，すでに同教授の著書『イギリスの新大学』（共訳，1970年，東京大学出版会）を翻訳した機縁によって招聘された経緯がある。帰国後彼の別の著書を『イギリス専門社会と大学』（共編訳，1998年，玉川大学出版部）として翻訳したことでも引き続き影響を受けた人物である。ちなみに，私を囲んで数人の教授達と懇談会が開かれた時に，他のことは忘れたが，日本の太陽暦に対して太陰暦がどのような機能を持つかを根ほり葉ほり尋ねられたのにはいささか閉口した記憶が残っているけれども，恐らく日本からの客人の教養がどの程度かを確かめたのであろう。

また教授会に女性の活躍度を確認すべく陪席させてもらった時に，女性教授達が喧々諤々と積極的に発言して議論をリードする雰囲気が漲っているのに圧倒されたのを覚えている。大学教授職に占める女性教授の割合が少ない当時の日本（現在も尚少ないが）では，その種の雰囲気は全然ない時代（大学によっては多少あったかもしれないが管見ではない時代）であったし，その点，想像以上に日本とは異なる文明の世界を垣間見た思いがした。中根千枝『未開の顔 文明の顔』（1959年，中央公論社）には時間に極端にルーズなインドと厳格な英国の事例を紹介してあったので，それほど文明の違いが存在するのかと学生の頃から興味を抱いていた。特に中根は後日，ジェンダーギャップの著しい東大において初の女性教授になって「ガラスの天井」を突破してインブリーディ

ング（特に男性閥）に風穴を開けた元祖であったし，未開地に単身乗り込んでメスを入れ社会人類学やチベット史において国際交流を開拓し牽引した学者であった。その人物の手になる書物で文明国と折り紙を付された英国において，女性教授の活発度がどの程度であるかを実地に確認すべく教授会への陪席を所望して参与観察した結果は，納得の行くものであった。彼女が学者の世界のジェンダーギャップを破る先覚者となったのも然る事ながら，私が大学入学以前の1950年代の昔に，インドの未開の奥地（アッサム，ヒマラヤ）をうら若き女性が単身で探検しカルカッタに足を伸ばして「未開且つ悠久の国」を探索した傍ら，英国やイタリアなど文明国に渡ってそれと比較して披瀝された彼女の四年間を費やした冒険心と洞察力に富む偉業に私はいたく感銘した。その意味では私の人生に与えた影響力のある本の1冊には中根の書物が入ると思う。なお付言を一つ。当該大学で学長を務めた化学者のキース・モーガンは，後にオーストラリアの大学の学長や日本の大学の教授を歴任した後に，広大センター客員に招聘したのに加え共同研究を行った経緯があるが，英国の学長特有の深い学識の持ち主であることを改めて知ることができた。

第4回　これまでの研究生活（就職後～現在）

（1）大阪教育大学時代

広大では，博士課程修了後に当時中央図書館の2階に所在した「大学問題調査室」（1970年設立）の助手（教育学部助手の併任）を「大学教育研究センター」（1972年設立，なお後の2000年に「高等教育研究開発センター」へ名称変更）の前に務め，記憶に残る仕事の一つとして飯島宗一学長の英国大学視察（1970年）に際し出版直後の『イギリスの新大学』（前出）について1時間ほど御進講を仰せつかった。その後17年間（1971～1988年），大阪教育大学（以下，大教大）の学部と大学院の両方で講師，助教授，教授を務め教育社会学および学校社会学を担当したことを顧みると私の経歴の中で重要な比重を占める。しかし当該大学は在任中では最初から最後まで紛争に明け暮れ，紛争の中に大学が埋もれている，といった混沌たる様相を呈したのは予想外であった。教育社会学者としての学問研究もさることながら，机上の学問よりも実践の学問を追究するのが本業となったほど，よく言えば「教育の社会的事実」の実地検証に精力を費やし，悪く言えば私のアカデミック・キャリアの中核部分の貴重な時間（30～40代）を剥奪されて浪費したとの慙愧の念の滞り具合は簡単には払拭できないほどである。広大時代は，入学時から卒業時まで60年安保，70年安保といったキャンパス・ターモイルの破天荒続きであったのに対して，大教大時代は内容的には「障害者」「同和教育」「大学移転」などの問題が輻輳しつつ中心を占めたので多少異なるとしても，大学の本丸部分の授業が成立困難な状況が在任中ひっきりなしに繰り返されたのであるから，広大から開始された大同小異の「大学紛争」が次に広大へ奉職するまでの17年間収束せず持続したと言ってもあながち誇張とは言えまい。ただ，大教大時代は，日本は高度経済成長時代であり，インフレが続き狂乱物価や特に土地高騰の最中を驀進したのであるから，その後，広大への異動以降にスタートした経済的空白の30年間にデフレに見舞われ国民の給料が上昇しない停滞時代が起きたのとは様相を異にしていた。

大教大では，赴任早々から「団交」の洗礼を受け，教員は壇上に並らばされて学生諸君から詰問を浴びてつるし上げを喰ったし，授業も3分校（天王寺，平野，池田）がロックアウトされて校内立ち入り禁止が続出する有様であった。広大で続発したバリケード封鎖はなかったものの，ロックアウトは頻発した。前任校の広大でも覆面学生が学生部長などを団交でつるし上げる光景を観察したのと同じ光景を再現する場面はあっても中身は同じではなかった。広大では，飯島学長が，学部長を経験した役職を生かして学生の名前を記憶していて，学生が糾弾中に詰問するのを切り返して名指しして「〇〇君」と反論をした途端に，覆面の学生の方が恐れをなしてかハタと沈黙する風景が一度ならず見られたのは興味深い現象であった。覆面諸君は匿名では威勢がよいのに名前が割れた途端に鼻息を殺がれるのを目の当たりした。

半世紀前の政治の季節が吹き荒れる中での大学の状態は現在とは雲泥の差があるので，多少説明的に回想すると，当時は要するに紛争中であったと言うほかない。「S 君問題」「大学統合移転問題」などが起きて以来，いわゆる民主化のため助講会（助手講師の会）が教授会に吸収された結果，300人以上に膨張した教授会は直接民主主義の場へと一変したために，いつも数人，時には僅か1人不足に起因する「定員割れ」のため不成立に見舞われた。着任早々から教授会は流会を再々繰り返し，機動隊の突入を余儀なくする場合も少なくなく，上本町や難波などの学外を転々としたし，キャンパスには騒然とした浮足立った雰囲気が支配した。教授会では，種々の派閥によるヘゲモニー争いが見られるのは珍しくなく，いったんマイクを握ったら最後何が何でも離そうとせず延々と演説をしたがる教員が少なからず存在していた。中には一再ならず左右から猪突猛進して取っ組み合いをする猛者の教授達も出現したから，プロレスのリンクと見間違うほどの荒れようであったし，これが「理性の府」且つ「学問の府」である大学かと誰しも目を疑うほどの体たらくを示したのである。在任中に7〜8人ほどの学長代行が出現するほどエスカレートしても紛争が収束する気配が一向に醸成されなかったのであるから，落ち着いて教育研究に打ち込める環境とは程遠い空気が支配していたと言うほかない。文部省も紛争を理由に窓ガラスが割れるなど荒れ放題の教室があっても修復工事をしなかったほどである。

私が所属した教育学教室は最初のうちは平野分校に所在し，後に天王寺近くの寺田町に移転したが，最初に学長選挙で僅差にて理系候補に敗北した後20年以上にわたって冷や飯を食う学科になったので，『教育学論集』（教室の紀要）に「苦節26年」なる特集を編んで発刊したほどである。18名の教員からなる教室はバリケード封鎖中に座り込んだ2名の教官の中の1人が健在であったのを旗頭になぜか論客が多く，理系中心に持続していた執行部に批判的な風土を構成していたし，教室会議は何時も喧々諤々の雰囲気が支配していた。私が居合わせた17年間の終わり頃になって教室から学長を輩出し，その後にも3人輩出し，都合4人の学長が連続して誕生したのは，この間に政権交代が起きて教室は反主流派から主流派へと転じた証左である。こうした「政治の季節」の進行中に遭遇した体験から学んだのは，机上の学問よりも実践のそれであり，今日決定した事柄も明日は引っ繰り返るという無常観が支配したケセラセラ（なるようになる）の状況が進行するなかで比重を増す学問は，教育社会学であるよりむしろ政治社会学か教育政治学であったかもしれない。

ちなみに大学以外の学校も当時は混乱状態に見舞われていて，学生が勉強の雰囲気からあまりに

乖離した状態のなかで右往左往していたのを思い出すにつけ今でも気が滅入る。例えば教育実習で或る小学校へ学生を引率して指導に当たった折に，中には実習どころではない荒れに荒れた現場に遭遇して唖然とした。市内の学校の中で血気盛んな学生が全員集合したかと訝られる学校では，校長室が占拠されてしまい，あろうことか校長の机や椅子は廊下に放り出されたままの凄まじい状態になっていた。占拠した学生は，血気盛んだが大人しく勉強するタイプが極端に少ない状態を示していた。この一事が万事を物語っており，将来男子学生の中からは校長輩出は困難だと先生達が真顔で憂慮するほどの惨状が浮上していたのである。

この時期に学生の政治的活動への調査分析はしなかったものの「学閥」との関係で教育現場である小学校における教員の学閥現象を調査分析した実績がある。すなわち大教大の前身の天王寺師範と池田師範の対立が昂じて環状線の内外に分かれて学閥の抗争が教員ポストの陣取り合戦さながらに長年持続した。この現状を対象に据え，詳細に実証的に検証を試みた論稿「小学校教師の経歴型―大阪市の小学校教師の輩出条件」（1974年，大阪教育大学教育研究所報，第9号）を仕上げた。大学版の学閥の問題は引き続き研究した一方で，小学校版の学閥の問題については，「大阪府教職員組合名簿」を対象に鋭意検証した当該論考が最初で最後になった。旧制の出身者が消失し新制の大教大出身者が支配する時代になった時点で学閥は終焉を迎えた。

こうして広大にて大学再建を真剣に考える機会に直面したと同様，大教大でも在任中に大同小異の問題を考えざるを得ない機会に巡り合わせたのは，「大学の本質とは何か」を考える点では駆け出しの高等教育研究者にとっては得難い機会となった。「大学とは何か」「大学教育とは何か」「大学教員（職員）とは何か」「学生とは何か」等々を総合的に考えることの重要性を痛感して，自分なりの問題意識を探求する事始めになった。なお，かかる状況とは別に大阪市教育員会社会教育専門委員の委嘱によって調査研究『成人教育に関する調査報告書』（1971年，共著）を嚆矢に実証的研究に取組んだので，この時期から大学教育のみではなく生涯学習の重要性を意識し始めたし，そのことは後日には広島県生涯学習審議会会長，全国社会教育委員連合理事などを務め，あるいは生涯教育学会の活動に取組むなどの活動へと接続した。

広大での卒論の勉強を通して学修した論点は，入学試験の改革であるのと格差社会によって入口の選抜（選別）機能が人材を配分し，出口での社会への人材配置によって，格差社会の再生産が生じるメカニズムが日米共通に存在する事実であった。その点を想起すると，当時の日本では「学歴社会」が教育社会学の主要な論点の一つであったが故に，学歴研究があたかも流行現象の如く積極的に展開されたことを指摘できる。タテの学歴は，小中高大などの学歴を意味し，ヨコの学歴は同じ大学でも大学の数だけピンからキリまで学歴の序列が機能していることを意味しており，こうした事実は，広大ですでに新堀門下で研究を開始していた「学閥」研究の射程内に入る。

高等教育の大衆化やユニバーサル化が進行する時代には，進学率は次第に上昇するのと呼応して，多くの子弟は大学を目指して受験勉強に勤しむ一方で，大学の中のヨコの学歴が幅を利かす社会が持続する限りは社会格差に対応した大学格差の支配を被らざるを得ない。下位階層出身の子供が文化資本，ハビトゥスなどの影響の下に大学への進学によって山積する阻害条件をなんとかクリアして大学まで進学しても，大学格差の序列メカニズムが機能して「偏差値」と「輪切り」を媒介

にした選抜と配分の振り分けが容赦なく執拗に機能する限り，出口の就職時には大学格差に応じて決まる就職を媒介にして格差社会の再生産が惹起される。

こうした問題を敷衍して考えてみると，大学の学閥が抑制される米国では，大学の序列が固定化されないで横型の競争を基調とした八ヶ岳型の「連峰型の構造」を呈するのに対して，学閥が抑制されない日本では，大学の縦型の序列が東大を頂点にした富士山型の「尖塔型の構造」を呈する。前者は開放的，後者は閉鎖的な構造を呈するので対照性が際立つ。しかも入試が偏差値ではなく適性検査かその類似形態によって行われる米国では，日本のように「輪切り」による選別が厳しく行われないばかりか，輪切りで処理できないギフテッドや天才などは日本では「浮きこぼし」として除外されるのに対して，米国では除外されないで許容範囲に置かれがちである。つまり格差社会と大学格差と閉鎖的社会構造とは米国では緩やかに結合する反面，日本では強固に結合する。大学紛争の底流にこの種の格差社会，大学格差，閉鎖的社会構造の関係が横たわっている以上，早晩この問題にメスを入れなければならない，という問題意識は，紛争中の具体的な事象に遭遇する中で次第に強まり，やがては「学問の大学」と「国家の大学」の比較へと接続させて検証することへと帰着する。

ところで，大教大時代で看過できない事柄には，広大の教育社会学講座の人事に恩師から推挙されたにもかかわらず，不本意な結果になった一件がある。この件は，上述した修士課程の2年間に教育社会学講座内に生じた摩擦が尾を引き，学部から開始した高等教育研究が不連続現象を帰結したことと因果関係がある。当時の講座主任から恩師と私は「同じ穴の貉」と揶揄嘲弄されたことを想起すると，恩師の退官時にその門下を助教授に任用することは論理的には生じ難い。しかもその発言者の愛弟子が現講座主任とあってはなおさら生じない。結局，退職した講座主任（恩師）の推挙した候補者を現講座主任が任用せず自分が推挙した候補者を任用するという馴れ合いのお手盛り人事を帰結するのは当然至極となろうし，実際にも寸分違わないその通りの顛末となったのである。広大では，教授がその下に助教授（または講師）を任用する場合には，年齢差の大きい若手を選ぶ事例が散見されており，「若手を任用して助手代わりに使う」と蔭口が囁やかれていたのは知る人ぞ知る。目下論じている件の場合も2人の候補者間に10年の年齢差が存在し，教授とは10年と20年の差異があるから同じ原理が作用していると見做しても必ずしも面妖とは言えない。教授と年齢が近い人物だと教授の意見が通りにくいが故に任用をとかく敬遠しがちとなる反面，年齢が遠い人物を助教授よりも講師に任用して助手代わりに使うわけである。実際その種の人事が某講座（H・N 講座など）では行われていたと憶測すれば，インブリーディング，グレシャムの法則，パーキンソンの法則などが容赦なく作用し，講座の学問生産性能力が劣化を辿り大学観や学問観が「学問の自由」の理念に背反することになる事例と化していてもおかしくはないだろう。少なくともこの種の人事では講座の学問的発展を期すとか，学会を牽引する学会長の輩出を期すとか，国際学会のリーダーを養成するとか，などの起死回生を招くイノベーションは生じ難い。実際，私見ではこの種の人事を行った講座はその後の講座の学問発展を中長期のスパンで眺めると失敗した事実が察知できる。確かに，教授と助教授の関係が年齢差を基軸に論じられることは少なくなく，目下論じている人事にも御多分に洩れずその要素が入っていることは想像に難くない。

けれども，それ以上に，講座内のインブリーディングに力点がある人事だと見做すのは説得力があろう。学閥で以て人事を固めるインブリーディングの力学は，講座人事では純粋に学問発展を模索する研究者よりも「欲望」を重視する研究者が少なくないと想定すれば，続発しない方よりも続発する方に軍配があがるだろう。講座の教授と助教授が世襲の親子や主従関係のように同じ主義主張に彩られて旗色鮮明である場合は，特に摩擦は生じないが，設立間もない講座の場合は，教授と助教授の主義主張が水と油の如く異なる場合は珍しくない。実際，俎上に載せている戦後誕生した新制大学第1期の講座では，教育社会学講座を制度化する場合に，教育学出身者を配置した結果，教授と助教授は教育社会学の新設には必ずしも適切ではない研究者の組み合わせで出来ていることが分かる。どちらも教育学の出身者で，片やカントや片やルソーの研究者である点では共通性を有しても，教育社会学の講座と称する限り，教育社会学の元祖（エミール・デュルケーム）や主唱者を基盤に新たな理論や実践の創造性を発揮する研究者を講座に配置する必要があるにもかかわらず，それに背反していては教育社会学の実質的発展は実現しないだろうと見込まれる。その点が厳しく問われる人事において，教育社会学論の発展を真に模索してきた前講座主任の眼鏡に叶う候補と，そうでない現講座主任の眼鏡に叶う候補には自から相違があるのは必至となる。前者を押し切って後者のゴリ押し人事を断行したのは，実は現講座主任の恩師の息が強くかかり同じ欲望主義で結束した体質に淵源する，言ってみれば学問的本質に悖る原理原則が当該人事へ投影されたからである。上述した通り，欲望は恐怖と結合して非合理性を発揮するが故に，学問の発展よりも講座の私物化を優先する価値観との親和力が強いのは明白だと見做される。

学問の発展を名実ともに標榜すればよいものを，それよりも教授の所有欲という「欲望」の充足とメンツの維持に主眼を置くあまり，「学問生産性の本質」を一顧だにしない状態が罷り通る暴走を来す。それは本末転倒の極みであり，学問の発展を標榜する理念を是が非でも遵守するどころか，それを欺く卑しい営みと言われても仕方はない。社会学的に言えば「普遍主義」を「特殊主義」が蔑ろにするのである。とは言うものの，現実は小説よりも奇であるらしくとかく理念を出し抜きがちである。欲望主義が跋扈して，不当な人事を行うと，当然，不採用となった側の恨みを買うとの恐れを抱くことに起因して「恐怖」なる後遺症が襲う。そうした応酬を介して人間関係を歪にする結果，学問以外の側面にエネルギーが注がれる罠に陥るのは必至となり，結局は学問の発展を阻害する。実際，講座主任の陥っている学問的価値を追究する精神が衰耗した風土下では学問は発展しないし，「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」の譬え通り，主任のドクトリンに似た汚染した空気が講座を覆うし，いったんその汚濁した風土が成立すると改革は困難と化す。同じ風土に染まった講座担当者が誕生するから，それこそは真底から学問発展を阻害する正真正銘の「同じ穴の貉」と化す。主任を超える才能の持ち主を抜擢し，引き抜いて，任用しないでは講座の将来は暗いのも同然の状態を招きかねない。講座の私物化によって汚染されればされるほど，学問の発展を促進する開放性どころか発展を阻害する閉鎖性の風土が悪魔のごとく蔓延り，徒弟制度の現代版たる時代遅れの慣行や弊習が支配して悪しき講座制の馬脚を表すのが落ちである。かくして名君の存する講座はいやがうえにも学問的価値を高めるのに対して，不在の講座は学問的価値を貶めるという人事の体たらくに起因する功罪はとどまることなく容赦なく具現するから，まさしく「悪貨は良貨を駆逐

する」（グレシャムの法則）のである。功罪はよしんば即刻具現しなくても中長期のスパンでメタ評価すれば，やがて手痛い後遺症となって講座の衰退に向けてしっぺ返しをするはずである。

なお，大教大に赴任して当惑した件について付加して述べておきたい。話したくない話なので口外していない秘話の類だが，自分の生涯では忘れられない忌まわしい一件を事実の曲折なしに記しておきたい。大教大の任用人事に際し広大の講座主任へ推薦が依頼されたのを機に，講座主任から「教育社会学の公募人事へ応募するか」と当時教育学部助手（センター助手併任）であった私へ打診があった。教育社会学は私の専門領域なので「諾」の返事をした。確か年の瀬の12月30日に帰省中の身を呼び出されて打診があって即刻願書を提出したが，社会教育と教育社会学の3人を任用する人事は，新設科目開講の関係で急を要したせいか2か月後の2月末には異例なスピードで決定した。当該人事は，競争率14倍（教育社会学の場合にのみ該当）で私が任用されたため競合した他者は社会教育へ回って任用されたと聞いたので，この難関を突破しての任用は私には幸運であったものの「開けてびっくり玉手箱」であった。それは赴任して教室主任から「教育社会学と同和教育を前期から担当されたし」との要請に接して腰を抜かすほど仰天したのであるからであり，広大で打診があったのは前半の教育社会学のみで，後半の科目への言及は一切なかったからである。後半の方を打診すると当人が拒絶するから一言も言わず隠蔽しておいて承諾させたのに違いない。背後に蠢くこの絡繰りの存在が推理し謎解きするまでもなく即刻バレたのであるし，そこには度し難い魂胆が透けて見えるのであった。しかしその時点では後の祭りで泣き寝入りするしか他に方法は無きに等しいと判断して，人事の経緯に矛盾があるので「担当を外して欲しい」と教室主任に即座に懇請した。だが「公募に応じた広大の責任だから承服できかねる」との返事であったし，大教大の側になんら落ち度がないのは尤もであった。矛盾の存在を声高に主張すると紳士協定を破棄した広大の責任問題にエスカレートするのは回避できないことを憶測して自重し，我慢して，所定科目を後期から開講する決断をした。幸か不幸か高倍率を突破して任用された以上，それに報いるのは当然至極であり，それに匹敵するほどの学識と実力を短期間にでも身に着け発揮しなければならぬと覚悟を決めた次第である。「被差別部落」と「未解放部落」の差異すら知らないほどの想像を絶する無知状態の実力である以上，その状態を放置せず学者生命をかけて一日も早く克服する必要があったし，半年間に少なくとも約60冊の書物や論稿類を迅速に且つ熟読玩味しなければ難関突破はできそうになかった。

しかし推薦者が人を騙す悪巧みを平気で仕掛けた理由は，すでに言及した講座問題の後遺症のなせるわざとしか想像がつかないから，ある意味ではこれぞ幸いと闇討ちを仕掛けられたというほかあるまい。その筋からの就職斡旋は無いと諦めていた矢先にそれがあったので内心は魔訶不思議に思い奇妙だと気を揉ないでもなかったが，案の定であったから平気で仕掛けたどころか故意に仕組んだ陰謀（計略）そのものであり，大学教授の品性を微塵も感じさせない暴悪なる振る舞いであると落胆した。馬鹿げたことを平気で行う人種である。耄碌した講座主任には自由（少なくとも「学問の自由」）の観念は完全に欠如していて，講座の学的発展を期すような気魄の籠った学風は皆無なことを曝け出したとしか到底思えないから，愚かしさを嘆き悲しむに如くはなしといった感慨に襲われた。全然勉強した経験がない者がいきなり前期から無謀にも担当せよと言われて面食らうば

かりになるのは当然であるが，そのことも織り込み済みの卑劣極まる画策を弄したと言わざるを得ない。差別の非合理，不合理を扱う科目を素人に担当させても平気なのか蔑ろに扱うのは差別された人々への冒涜そのものである。立ち眩みの時は目の前が真っ暗になったが，今回は真っ白になった。しかしあわよくば私を葬り去るべく仕掛けられた罠に嵌らず，冷静に処したのは正解であった。結局，気を取り直して，後期へ授業を回して時間を稼ぎ，その間，原田伴彦，盛田嘉徳などしかるべき専門家から集中的に手ほどきを受けて実力を養い，後期から2年間全国の大学の先陣を切って「学校同和教育」を担当した（「社会同和教育」は新任の他者，歴史と行政は非常勤が各々担当）。この時期は，学内に「差別発言」が起きたのを契機に「解同」から2回ほど糾弾が入った時期と呼応して学内外の緊張度は極めて高い状態と化していた。ましてや大教大は当該科目が単独では文部省から許可されない時期に，全国で最初に当該科目を「社会教育」内に設置して授業を開始した名にし負う先駆的大学であったが故に，如何に大きな緊張感が学内に漂い授業担当者を襲っていたかは想像するにあまりある。だがこのような寝耳に水の体験を積んで苦境を試行錯誤的になんとか切り抜けたお陰で，教育社会学だけ担当していたら得られない学問領域や知識やイデオロギーなどに関して，貴重な学修，探求，研究，実践などの修行を行えたと言えよう。

科学社会学の研究

大教大時代の最大の仕事は『マートン科学社会学の研究－そのパラダイムの形成と展開』（1987年，福村出版）を同名の博士論文（1985年）を基にして文部科学省1986年度（昭和61年度）科学研究費補助金〔研究成果公開促進費〕を受けて出版したことである。その意味で，私のアカデミック・キャリアの中でロバート・マートンを博士論文の対象に選んだことの比重は大きく，重要な選択であるばかりか，その主たる内容である「科学社会学」を専攻し集中的に研究した意義は極めて大きいと思う。教育社会学と科学社会学は学問研究や大学教授職研究における車の両輪と言える方法論を構築しているのである。もちろんそれは成功した側面だろうし，他に失敗した側面もあろう。

科学社会学の始祖のマートンをなぜ学位の対象にしたかの理由を問うと，その契機は本格的にはイェール大学に留学してから以降にあった。「逸脱行動の社会学」を手掛けた修士論文においてマートンの「アノミー論」に注目して腰を据えて研究し始め，留学中のイェール大学において，クラークの書物には高等教育研究でありながらも科学社会学への造詣が深いことを発見して勉強不足を自覚したのを皮切りに，帰国後に一念発起して集中的にマートンの著作を自分なりに読破して博士論文でそのアウトプットを追究することになった経緯が思い浮かぶ。当時の日本では，科学社会学の開拓者は例えば倉橋重史『科学社会学』（晃洋書房，1983年）は存在したものの，マートン研究は未発達であった。マートンは著名な社会学理論に比して科学社会学は未だ有名無実の段階にあったのを考慮して，彼が科学社会と大学社会の交錯領域にアプローチして科学論を土台に大学論を開拓している貴重な研究者であることに注目するのは不可欠であったばかりか，関連した研究への着手は貴重でしかも時宜を得ていたのである。科学社会学の謂う「科学社会＝ scientific society」は「研究」を対象としているのに対して，教育社会学の謂う「大学社会 =academic society」は「研究・教育・学修」を対象とする点でそれぞれ固有の縄張りを構築しているのであるから，両者は期

せずして「研究 =research」そのものに照準の矛先を向けるという関係を有しているのである。その意味で大学の科学者を対象に米国のノーベル賞受賞者を分析した，彼の弟子のハリエット・ズッカーマンの『科学エリートの研究』（1977［1980］玉川大学出版部）は科学社会学研究と教育社会学研究との融合性が高い領域に焦点を合わせて扱っているユニークな研究となったと見做される。米国に比して日本にノーベル賞受賞者が少ないことにも起因するが，同様の研究は日本では出現していない。

ところで，クラークのように直接出会って薫陶を受ける機会には恵まれなかったものの，コロンビア大学の社会学講座を主宰していた晩年のロバート・キング・マートンとは文通する機会に恵まれたので，そのエピソードを一つ紹介してみよう。彼の生年月日は1910年7月5日であったのを踏まえて「ニューヘイブンで生まれた息子の誕生日と同じです」と手紙を書いたところ，あにはからんや彼の母親が1日遅れて役所に出生届を出した結果，「私の誕生日は，本当は4日です」との意外な返事を頂戴した。世に流布した伝記では5日が通説として罷り通っていたから，この話は文通した私だけしか知らない秘話になったのではなかろうか。もっとも彼の誕生日はその出自ほど重要ではないので，これ以上詮索する必要はない。重要なのは，東欧から移民した労働者の子供としてフィラデルフィアの都市スラムに生まれ，ギャングの一員として過ごし，あるいはマジシャン（手品師）として生計を手助けした子供時代は，後日の一世を風靡した学者時代に比してあまりにも同情を買うほどの多事多難な日々であったことである。

だが彼は別の顔も擁しており，8歳になるまで公立図書館の常連として異常な学修意欲を燃やして文学・伝記類を中心に図書を読み漁って博覧強記の深い学識を醸成した。この点は日本では南方熊楠に匹敵するかもしれない。マートンは著書『On the Shoulders of Giants』（1965）を書いているが，彼自身が巨人であったし，数カ国語に精通した語学力を含め才能豊かな秀才（天才）であった。地元の高校を卒業後市立大学のテンプル大学に入学して，恩師ジョージ・シンプトン講師に巡りあってよき指導を得て頭角を現しハーバード大学大学院へ進学した。その際にはいずれも奨学金を得て順調なヘッドスタートを切ったけれども，それに驕らず子供時代からの経済的苦労を忘れず，朝4時半には必ず起床して終日ひたすら学問に邁進するという質素倹約の生活を旨とするライフスタイルを確立した。恩師に恵まれタルコット・パーソンズ，ジョージ・サートン，ピトリム・ソローキン，L.J. ヘンダーソンといった当時の名立たる著名教授に邂逅したのは幸運であった。以上，チャールズ・クロサーズ著『Robert K. Merton』（1987）に依拠して伝記の一端に触れてみたところ，彼が特に社会経済的出自に恵まれず苦難な子供時代に喘いだことや恩師に恵まれたことなどは，偶然にも私自身の子供・青年時代と重なる部分も見られるのである種の親近感を覚えたほどであるけれども，その思いが一挙に吹っ飛ぶほど途方もなく恵まれた才能の持ち主であったことが窺える。

それはそれとしてさておき余談だが，中山茂と話した時に「ハリエット・ズッカーマンはガールフレンドだろう」との質問があったので，「存じません」と回答したことがあるが，それは有名な話であったのかもしれず，その後，彼女は後妻になったらしい。最初の夫人の子息がノーベル経済学賞を受賞（1997年）した，MIT のポール・サミュエルソン門下のロバート・コックス・マート

ンなのは周知の通りである。

なお，科学社会学をライフワークとして研究するつもりでマートン研究を開始して博士号まで前進したものの，科学は専ら自然科学の領域を対象にしているのに対して，人文科学や社会科学はこの学問の圏外に位置しているのは自明である点に気づき，科学社会学を本格的に専攻するのを敬遠するようになる。科学社会学は，科学の社会的事実を研究する学問であるとしても，科学史や科学哲学と同様に，数学や物理学や生物学など自然科学の内容論に精通していなければ隔靴掻痒となるが故に自から限界がある。私の場合は，教育学，教育社会学，社会学などの内容論にはある程度精通している（と思っている）としても，数学，物理学，医学，生物学，工学，農学といった自然科学領域の内容には暗いから限界がある。

その点，彼の提唱した「科学的生産性」（Scientific Productivity）の概念も自然科学に偏重した概念である以上，人文科学・社会科学は蚊帳の外に置かれているのも同然であり，それは知識や学問の範疇に照合すると狭小な概念であることに気付くのは時間の問題であるのは否めず，自分の力量ではいくら果敢に研究しても末を遂げられない。科学史や科学哲学と同様に，自然科学の学力が乏しいと蘊奥を究めるのは困難だと悟って，博士号執筆中の時点（1984年）でギブアップして，文中に今後は科学社会学を方法論にして，アカデミック・プロフェッション＝大学教授職の研究に専念したいという主旨の抱負を述べた。新堀も1973年の早い時点で，学問的狭小さという同じ意味合いから科学的生産性を学問的生産性に改鋳して使用することを提唱する運びになった。それを契機に，私もその時点からその提唱に追随する方向へ転進したし，いくつかの論文では使用するとともに最近の著書『学問生産性の本質』（2022年）で言及した通り学問的生産性を「学問生産性」に短縮して使用している次第である。

この時期には，学位授与（1984年）を足場に科学社会学をベースに取組んだ「学問中心地」の研究を手掛けて『学問中心地の研究－世界と日本にみる学問的生産性とその条件』（編著，1994年，東信堂）を出版している。これは二十世紀学術財団（木川田財団）の研究助成（1984年）を受けて「学問的生産性の研究」を開始，その成果を共同研究へと発展させて公表した成果を意味し，爾後今日に至るまで持続的に追究する重要な主題となった。

大学教授職の研究

大学教授職の研究では，米国留学中から手掛けた米国の「学問中心地」の形成過程に焦点を合わせた調査研究を中心に刊行した，『大学人の社会学』（1981年，学文社）が最初の自著である。科学社会学の理論や方法論を援用して展開している本書は，その意味では科学社会学の研究を敷衍した性格を多分に有する処女作であるのは固より，その後の「学問中心地の研究」や「学問生産性の研究」などと有機的に連関しあう一連の研究の出発点になった性格を有する。同様に，この時期に刊行された，新堀との共同研究（分担執筆を含む）や編著を構成している一連の書物も科学社会学との関係が深い。すなわち『学者の世界』（共著，1981年，福村出版），『学問の社会学』（共著，1984，有信堂），『大学教授職の総合的研究－アカデミック・プロフェッションの社会学』（共著，1984年，多賀出版），『大学評価と大学教授職』（編著，1993年，高等教育研究叢書12），などを手掛けている。

学問論

同じく，科学社会学を基盤において共同研究を行ったこの時期の著作にあたる学問論では，『学問業績の評価－科学におけるエポニミー現象』（共著，1985年，玉川大学出版部）があり，学問業績の評価の指標である「エポニミー＝冠名」を体系的に分析し，学問中心地の推移を実証的に把握した。また，「ジャポノロジスト＝知日家」を対象にして共同研究を行った結果は，『知日家の誕生』（共著，1986年，東信堂）として刊行しており，日本が発展するには「知日家」の養成とその応援が大切であると主張している。本書を出版した頃が，知日家の一人のエズラ・ヴォーゲルによって『ジャパンアズナンバーワン』（1979年，TBS ブリタニカ）ともてはやされた時期に該当するから，日本が絶頂期に到達し有頂天になった最中にほかならない貴重な数年であったのであるが，それも束の間，その後「空白の30年間」へと失墜を辿りはじめ坂道を転がり落ちたと言ってよかろう。なお，この時期に同じくマートンの科学社会学そのものについて論じた論文を『現代社会学』第24集（共著，1987年，アカデミア出版会）に発表している。

職業論

職業論（職業指導論）では，『職業と教育－職業指導論』（共編著，1980年，福村出版），『現代の職業と教育－職業指導論』（共編著，1991年，福村出版）などの業績がある。職業論は，大教大時代に手掛けた教育社会学の研究領域であり，学歴社会の中で生涯のキャリアをいかに形成するかは重要な問題であるとの認識から，職業指導論との関連性を重視して体系的に研究したところに特徴が見出される。折しも，「教育社会学」を基軸に「初等教育原理」「中等教育原理」などの教育科目を講義したこの時代には，大学や大学教育を対象としながらも，それに限らず主としてプロフェッショナル・スクール系統の教育を対象にし，小・中・高教員の養成と訓練と関係深い領域へのアプローチを心掛けたことも小・中・高の教員養成を重要な任務とする大学教員にとって避けて通れない重要な観点であった。職業論はその一端を示している研究成果に位置付けられると見做して，集中的に取組んだ。

教育社会学論

大教大時代は，教育社会学の研究領域は豊富に存在し発展を遂げた時期であることに呼応して，社会化論，逸脱行動論，学校論，教育原理論，学歴社会論，教育病理論，学生運動論，等々共同研究を含めて多角的なアプローチを展開した点に特色が見出される。教育社会学の方法論を基調に置いて手掛けた「教育社会学論」では，次のような人間形成，逸脱行動論，学校論，大学格差，教育基本権，放送文化論，現代社会論，教育病理論，学校教育論，等々に関わる著書や共同研究の仕事が下記のごとく多角的に展開されている。この中で，「放送文化論」は私の著作ではやや異色のニュアンスを有するかも知れないが，大教大時代では，同僚（近藤大生）と二人三脚で放送文化基金を受けて，「OSAKA 放送利用ラーニングセンター」を設立して，共同研究を推進した。特に，NHK の「中学生日記」「お母さんの勉強室」などの TV 番組を活用して，NHK 大阪放送局とタイアップした事業として関西（大阪，兵庫，奈良など）を中心に「放送教育」関係の生涯学習に関与した活動を展開した実績がある。

『現代社会と人間形成』（共著，1973年，帝国地方行政学会），『名著による教育原理』（共著，

1975年，ぎょうせい)，『明日への学校』(共著，1975年，ぎょうせい)，『教育原論』(共著，1977年，福村出版)，『教育社会学』(共著，1981年，有信堂)，『日本の教育』(共著，1981年，東信堂)，『教育基本権確立の視点と課題』(共著，1983年，明治図書)，『放送に関する法律・経済・社会・文化的研究・調査』(共著，1983年，財団法人放送文化基金)，『現代社会と教育』(共編著，1984年，福村出版)，『教育の環境と病理』(共著，1984年，第一法規出版)，『現代学校教育の研究』(共著，1985年，ぎょうせい)，『新教育社会学辞典』(共著，1986年，東洋館出版社)。

(2) 広島大学時代

高等教育研究・大学教育に関する研究

大教大のローテーションで二部（5年制夜間部）を担当開始する直前に広大からスカウトがあって急遽，配置換えに依拠（1988年4月）して古巣のセンターへ帰還したのは青天の霹靂というか予想外の出来事であったと言える。教育社会学講座への帰還人事が不首尾に終わったのを苦慮した当時のセンター長（恩師）の采配人事であったが，私自身にとっては当該人事を起点に1960年代の学部時代から開始された，恩師直伝の教育社会学研究を中軸に据えた高等教育研究への追究の営みが大学院博士課程を擁した講座においておもむろに緒に就いたことを意味する。すなわちその営みはセンター内の講座で展開される教育と研究の両方の活動に結実したのである。早速，1986年から講座開設時以来の担当教授であった喜多村和之の転出（早大教授）に伴って生じた博士課程講座「比較高等教育論」を踏襲して退職まで18年間担当した（1989〜2007年）。当該講座は，高等教育研究の講座として全国の大学で最初に設置された由緒ある博士講座であることに鑑みれば，私の2代目講座主任への就任は，過去20年近くの広大，大教大でのアカデミック・キャリアにおいて皆無であった役割の取得を果たした意義を有し，その点では自分にとって文字通り画期的な出来事であった。換言すれば，大学教授の使命には，①研究，②教育，③社会サービス，④管理運営，⑤学会レフェリー・学会活動，⑥後継者養成，の6つの主要機能があるのであるから，当該人事異動は主として⑥の後継者養成を果たすことを意味しており，小・中・高の教員養成は行っても大学教員の養成は行わないし，とりわけ門下の後継者養成を行わない，大教大時代には完全に欠落していた機能を担うことになった点で俄然異なる重責を担ったのである。

ちなみに，①の研究を中心に論述している拙論では，私が如何なる研究に力点を置いてきたかは縷々説明しているものの，他の役割については紙幅の関係を考慮して十分な論述をしていないという難点がある。そこで簡単に補筆すれば，②の教育では，比較高等教育論，大学論などを担当し，他では教育社会学，学校社会学，初等教育，中等教育，同和教育，大学教授職論，などを担当した。③の社会サービスでは，客員教授（厦門大学，浙江大学，新潟大学，くらしき作陽大学，桜美林大学，など)，講師（京大，阪大，名大，大阪市大，愛教大，桜美林大，放送大，など)，講演(国内外の大学，企業，など多数)，各種委員会委員（文部科学省各種委員会委員長・委員，国内外の各種学協会の代表，会長，議長，理事，委員長・委員など)，審議会（広島県生涯学習審議会会長，理事，全国社会教育協議会理事など)，等々を務めた。④の管理運営では，大学の役職（学長，学長顧問，評議員，理事，研究所長，各種委員会委員長・委員など）を務めた。⑤の学会レフェ

リー・学会活動では，国内において日本学術会議連携会員，会長（日本教育社会学会，日本高等教育学会）をはじめ，各種役割（理事，編集委員，各種委員会委員長・委員など），国際では委員・議長（UNESCO 世界科学委員会委員・アジア太平洋地域議長），代表（HERA），日本代表（カーネギー大学教授職国際プロジェクト，CAP プロジェクト，APIKS プロジェクトなど），運営委員（6カ国教育比較プロジェクト）等々を務めた。この中の日本教育社会学会長について付言すると，広大の教育社会学講座の歴代主任から会長を輩出したのは当時までは一人（新堀）のみで意外と少ない。その点，新堀門下の教育社会学者である私が高等教育研究の講座を担当している最中に，学会会員の投票によって会長に輩出されたのは意義深い。教育社会学者としてしかも高等教育研究者としての認知が学会会員の選挙で行われたからである。このように諸活動に触れると，私のごとき平凡な大学教員でも各種の役割を委嘱されて果たしたように，大学教員の仕事は結構複雑多様な内容を包括して成り立っていることが自明である。

研究と教育以外の仕事は，学内外から頼まれて引き受ける場合が多く，中には気の進まない仕事もあるが，国や社会のお役に立つには無碍に辞退はできない場合もある。これらの仕事を引き受けるあまり，本務の仕事を忘却して，あたかもタレントと見間違うほどの活動に東奔西走し，あるいは学内政治に没頭するあまり研究を疎かにしてしまい，若い時代に嘱望された人材が伸び悩み失速してたちまち「過去の人」に転落してしまう事例も少なくない。大学教員の世界には本人が自分の本務は何かを自覚して矜持を固く保持しなければ案外早く身を崩してしまう魔力が作用していることも確かである。その点，フンボルトが言及したのをヘルムート・シェルスキーが『大学の孤独と自由』（1970年）において的確に指摘したように，そもそも大学の本質は「孤独と自由」の世界なのである。孤独に徹し且つ禁欲主義に徹しないでは，研究・教育・サービスなどの学問生産性を「見える化」できない世界である。その点，マートンのライフスタイルが匹敵するだろう。その意味では，大学教授職に最小限共通に該当する「使命」は何かと問えば，その多忙な業務をこなす中でとりわけ車の両輪である研究と教育にエネルギーを集中して，学者の矜持を忘れることなく「学問生産性」の向上に邁進するのが所与の使命となろう。

さて，話を門下生の件に戻してみると，その間に講座を通して指導した5人の院生の中の4人に対して，主査として博士号を授与したところ，予期せぬ出来事が起きたのである。すなわち博士号を授与した中の3人（小方直幸，福留東土，阿曽沼明裕）が東大から引き抜かれ，いずれも高等教育研究者として任用されたのである。その点は同じであるが，任用の仕方は区々であって，教授が准教授に任用された後に教授へと昇任したか，准教授がそのまま准教授に任用された後に教授へと昇任したか，あるいは教授がそのまま教授へと任用されたのであった。この中で教授が准教授へ任用されたのは「降格人事」であるから東大のメンツが示されていると読めなくはないので，興味深い事例ではある。ちなみにマートンのトゥレン大学教授からコロンビア大学准教授への異動は降格人事であった。それはともかくとして，ここでの論点に焦点を合わせると，この一連の人事のことは，大学格差が厳然と存在する現在，広大出身者の東大（旧帝大）教授への任用は有り得ないほど簡単ではないが故に，恐らく未曽有の快挙だと見做されても決して不思議ではないはずである。とりわけ，同じ門下から一人ならまだしも三人もの門下生が任用されたのであるから，まさしく稀有

な出来事であり尋常ならざる現象である。

恐らく東大では高等教育研究の人材育成が停滞していたので，謙虚に反省した上での人事ではないかと憶測できよう。仮に停滞していても，従来の東大では卒業生に特化して任用するインブリーディング人事が支配したはずであるから，他大学卒業生を引き抜く人事は仮に生じても例外であったに違いないし，その点，今回はインブリーディングを排除した点に革命的変化が起きているのではないか。それには，本人達の実力が評価されたこと，広大の実力が評価されたこと，の二点が背後で作用したのではないか。新堀が旧帝大（京大）へ招聘されたのは例外としても，私が推挙されながら達成できなかったと同様の旧帝大（東大）への挑戦を私の門下生はクリアしたのであるから，それは彼らの実力のなせる業であると同時に，上述した通り文理大の直系（末裔）を自認する広大の本領発揮というニュアンスが直截的に読みとれる。とはいえ特筆すべきは，東大が国際化を推進するうえで「外なる国際化」に先立って「内なる国際化」をまずもって実現し，アウトブリーディングを率先して遂行する自覚を吐露している，画期的出来事を意味すると解したい。換言するならば，旧弊を打破できずに来たさしものの動きの遅い旧帝大も漸く重い腰を上げて変化を来していると観測できるのであるから，それはとりもなおさず慶賀すべき未曽有の徴候に他ならないのである。

ところで，蛇足になるかもしれないが，私のように1969年に着手以来，半世紀以上も学閥研究を一途に追求していても，日本のトップレベルに画期的な改革が行われない実状からは依然として目を離しかねるし，このことに改めて注意を喚起したい。学閥現象の研究に執着する理由は，封建体制の江戸幕府と近代社会が案外似通った状態を呈していてその改革が不可欠だからである。江戸時代には「士農工商穢多非人」の身分が固定していて，特に全体の1％未満を占めた支配階級の武士は排他的な世襲制を敷いた点で一種のネポティズムやインブリーディングを維持したが，明治初期の「四民平等」（1870年）や「解放令」（1871年）の実現以来は制度的には封建体制は消滅したにもかかわらず，その代わりに尖塔型大学組織は似通った制度を保守した。大学社会成層の尖塔大学が明治以来インブリーディングを持続させている限り封建制度的構造を維持していると言わざるを得ない。その点，武士が独占する政治の世界ならまだしも学者が中軸を占める「学問の府」の世界では，広く学問を担う学者（研究者）が民主主義的行動に基づく活発な新陳代謝を欠如したまま閉鎖的な一握りの特定集団の学者が権威主義的に学問を掌握する構造の下では，学問的近親結婚が跋扈するのであるから学問の健全な発展は有り得ないだろう。例えば，学校基本調査を参照すると，今日（2023年）でも全国の大学教授（正教授）（69,870人）の中の東大教授（20,917人）は，その占める割合（1.85％）が江戸幕府の武士の割合（1％未満）には及ばないとしてもほぼ近似値に留まることに注意を払うならば，アナロジー的には武士と同様のまま世襲的特権階級を払拭できていないのである。

それはともあれ，翻って広大時代に取組んだ研究に焦点を合わせると，広大在任中には，高等教育研究に本格的に取組む機会の増加に拍車をかけられて，大学教育を含めて高等教育関係の領域を基軸にした著書や共同研究を少なからず手掛けるようになる。以下に列挙した主な著作は，大学教育，授業，FD，国際教育，ディプロマ・学位，大学改革，カリキュラム，大学財政，知識社会，

等々の多様な領域に跨っていることが分かる。重要な業績は，他の国の研究者と国際共同研究を行った共著『Going to School in East Asia』（2007年）がこの時期に光栄にも CIES の国際学術賞を受賞したことであろうし，同様の賞は2010年代にはさらに2件受賞することになった。加えて，この時期には，アジア，アメリカ，ヨーロッパなどでのプロジェクトや高等教育研究の国際共同研究を積極的に展開してアウトプットを実現したことは，意義ある活動だと言ってよかろう。国内的には，体系的共同研究を踏まえて上梓した『大学のカリキュラム改革』（2003年）において，大学カリキュラムを対象に分析した論考の中で，特に「教養教育」の衰退現象に焦点を合わせて論究してその問題点を指摘し，新たな方向性を対象にしたことは，1991年の大綱化政策以後に，教養教育のカリキュラムが形骸化している現状に鑑みて，20年後の現在に通底する問題点にメスを入れている点で先駆的研究になっていると言って過言ではあるまい。また，『大学教育とは何か』の中の論稿「学問の構造と大学教育の関係」はその後の学問論とカリキュラム論，教授―学修過程論，R-T-S ネクサス論の関係の展開へと連動している点で重要である。

以下には主な著書（単著，編著，共著［分担執筆を含む］）を掲載し，原則として論文は除外している（他の箇所でも著書を中心に掲載している）。

『青年心理学ハンドブック』（共著，1988年，福村出版），『大学教育とは何か』（共著，1989年，玉川大学出版部），『大学授業の研究』（共著，1989年，玉川大学出版部），『ファカルティ・ディベロップメントに関する文献目録及び主要文献紹介』（共著，1990年，高等教育研究叢書4），『大学教育の改善に関する調査研究－全国大学教員調査報告書－』（編著，1990年，高等教育研究叢書5），『Handbook of World Education: A Comparative Guide to Higher Education and Educational Systems of the World』（共著，1991年，American Collegiate Service），『国際教育事典』（共著，1991年，アルク），『Higher Education 12 Nation』（共著，1991年，Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching），『教育心理学小辞典』（共著，1991年，有斐閣），『東アジア三国（日本・中国・韓国）における高等教育改革の比較研究』（国際共同事業報告書）（共著，1992年，日本学術振興会），『Higher Education Policy: An International Comparative Perspective』（共著，1994年，Pergamon Press），バートン・クラーク『高等教育システム－大学組織の比較社会学』（単訳，1994年，東信堂），『社会学小辞典』（共著，1997年，有斐閣），『Higher Education Research at the Turn of the New Century: Structures，Issues，and Trends』（共著，1997年，UNESCO and Garland），『Handbook on Diplomas，Degrees and Other Certificates in Higher Education in Asia and Pacific』（共著，1998年，SEAMEO Regional Centre for Higher Education and Development），『変貌する高等教育』（共著，1998年，岩波書店），ハロルド・パーキン『イギリス高等教育と専門社会』（共編訳，1999年，玉川大学出版部），『世界の教育改革－21世紀への架ヶ橋』（共著，1999年，東信堂），『Research on Higher Education: Its Relationship to Policy』（共著，2000年，Pergamon Press），『Higher Education in a Globalising World: International Trends and Mutual Observations: A Festschrift in Honour of Urlich Teichler』（共著，2002年，Kluwer Academic Publishers），『Transformation in Higher Education; Global Pressures and Local Realities in South Africa』（共著，2002年，CHET: Center for Higher Education Transformation），バートン・クラーク『大学院教育の国際比較』（監訳，2003年，玉川大学出版部），『大学改革の現在』（共編著，2003年，東信堂），『大学のカ

リキュラム改革』（編著，2003年，玉川大学出版部），『Handbook on Diplomas，Degrees and Other Certificates in Higher Education in Asia and the Pacific: 2nd Edition』（共著，2003年，UNESCO Asia and Pacific Regional Bureau for Education，Bangkok），『System-Level and Strategic Indicators for Monitoring Higher Education in the Twenty-First Century（Studies on Higher Education）』（共著，2003年，UNESCO，CEPES），『Learning through Collaborative Research: The Six Nation Education Research Project』（共著，2004年，Routledge Falmer），『歴史学事典11宗教と学問』（共著，2004年，弘文堂），『高等教育概論』（共編著，2005年，ミネルヴァ書房），『今，教育の原点を問う』（共著，2005年，勉誠社），『Higher Education in the World 2006: The Financing of Universities』（共著，2006年，Palgrave Mcmillan），『Higher Education，Research and Knowledge in the Asia』（共著，2006年，Palgrave Mcmillan），『大学力－真の大学改革のために』（共編著，2006，ミネルヴァ書房），『Knowledge Society vs Knowledge Economy: Knowledge，Power，and Politics』（共著，2007年，Palgrave Mcmillan），『The Changing Condition for Academic Work and Careers in Select Countries』（共著，2007年，International Centre for Higher Education Research Kassel（INCHER-Kassel），『Towards a Cartography of Higher Education Policy Change: A Festshrift in Honour of Guy Neave』（共著，2007年，Center for Higher Education Policy Studies（CHEPS），『Going to School in East Asia』（共著，2007年，Greenwood Press）〔CIES 最優秀出版賞受賞〕。

研究大学・大学院

広大時代に研究大学と大学院を対象とした研究がいくつか存在するのは，この時期に全国的に当該領域への関心が高まったことと連鎖反応的に関係するし，「科学社会学」「学問中心地」「学問論」「学問生産性」などとの裏腹の研究であることの関係性が強い。クラークの著書の邦訳では，タイトルは「大学院教育」の範囲に入るが，内容的にはむしろ「R-T-S ネクサス」の問題を国際比較している点に論点の核心部分があるのであり，その意味では上でも述べたが，「ネクサス論」が学部教育よりも大学院教育において最も発展したと把握できる証左であり，国際比較では米国が主導性を発揮したと了解できる。

『研究大学の学術研究システムに関する比較社会学的研究』（研究代表者，1994年，広島大学大学教育研究センター），『大学院の研究－研究大学の構造と機能』（編著，1994年，高等教育研究叢書28），『大学院改革の理想と現実』（共著，1995年，大学セミナー・ハウス），『現代の大学院教育』（共著，1995年，玉川大学出版部），『国立大学院の現状と課題』（共著，1996年，国立大学協会大学院問題特別委員会），『大学院改革を探る』（共著，1999年，大学基準協会），バートン・クラーク『大学院教育の国際比較』（監訳，2003年，玉川大学出版部），『大学院の改革』（共著，2004年，東信堂）。

生涯学習論

職業論や放送教育論で言及したごとくかねてより人間の「社会化」に関心が高い私は，人間が誕生して一生涯を自主性・主体性を発揮して全人陶冶を実現し，充実したアイデンティティを形成する営みが肝要だと見做す視点から，大教大時代にも大阪市と提携した研究や NHK と提携した研究などを通して「生涯学習」へ関心を向けて来たし，翻ってこの時期においては広島県や全国の生涯学習審議会の活動に携わり，日本生涯教育学会に加入するなどの活動を務めつつ共同研究を行って

いる。

『生涯学習プログラムガイド（理論篇）』（共著，1990年，広島県教育委員会），『変化の時代の学校像－生涯学習社会への移行』（共著，1995年，教育開発研究所），『日本生涯教育学会年報』第16号（共著，1995年，日本生涯教育学会），『学校「大変な時代」』（共著，1996年，教育開発研究所）。

大学教授職論

大学教授職の研究は，博論にてライフワークの宣言をした時点から一層コミットメントを高め，理論・実践の両面で発展を期したし，その意図はこの時期，アーネスト・ボイヤーの「スカラーシップ・リコンシダード」の原著を「大学教授職の使命」（1996年）と題して邦訳した意図にも如実に反映されている通りであり，その意味で学問論との関係が深い。また，カーネギー調査に日本代表として参画（1992年）して，編著と共著（英語）によってこの領域の出版に先鞭をつけたことは画期的であったと言ってよかろう。江原武一と共編著（1996年）を執筆したが，その段階において，世界の大学教授職が「研究志向」「研究と教育半々志向」「教育志向」の三類型に識別できるとの発見をなした。この発見は，後知恵的に言えば国際学会において発見から約26年も経過した最近になって後述する『Teaching and Research in the Knowledge-Based Society』（共著，2022年）において，先駆的研究だとおもむろに認識され脚光を浴び始めた事実があることを鑑みれば，世界的に「R-T-S ネクサス論」が漸く注目されはじめた動向と関係が深い現象であると言わねばならない。その他の著作では，『大学教授職と FD －アメリカと日本』（単著，2005年，東信堂）は，退職記念として FD 論を日米比較の観点から考察したものであり，FD 論発展の動向にメスを入れた。大学教授職論の自論は，この時期にはドイツのカッセル大学の紀要特集『Key Challenges to the Academic Profession』（2007年）に掲載されている。ちなみに，大学や他の機関から様々な主題で講演を依頼されることがあるが，大学教授職論，とりわけ FD 論はこの時期から10年以上にわたって全国の大学で集中的に実践が行われる，ある意味で最盛期を迎えたが故に，その影響があって私は沖縄から北海道まで多くの大学から招聘されて講演をする機会が与えられた結果，ここでの詳細は割愛するが，私のキャリアの中では生涯で最も講演回数が多数に上った時期として記憶される。

『大学教授職の使命－スカラーシップ再考』（E. ボイヤー著，単訳，1996年，玉川大学出版部），『大学教授職の国際比較』（共編著，1996年，玉川大学出版部），『The International Academic Profession: Portraits of Fourteen Countries（共著，1996年，The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching），『The International Academic Profession: Portraits of Fourteen Countries』（共著，1996年，Center for International Higher Education，School of Education，Boston College），『大学教授職と FD －アメリカと日本』（単著，2005年，東信堂），『Key Challenges to the Academic Profession』（共著，2007年，International Centre for Higher Education Research Kassel（INCHER-Kassel），Werkstattberichte-65）。

大学評価論

この時期から全国的に「大学評価論」が勢いを増したのは，それほど大学発展の動きが欧米諸国，とりわけ米国に比して立ち遅れた点に原因があると言わねばならないだろう。米国では，1925年から大学ランキングが開始され，1960年代から拍車がかけられた後に2003年からの世界大学ランキングの開始時期では米国モデルが圧倒的優位に立った一方で，日本は後塵を拝して遅々とした歩

みを辿ったのである。その潮流の中で，1994年から朝日新聞が日本版の大学ランキングに先鞭をつけたのは，画期的な取組みであり，その第1号において拙論を寄稿したのをはじめ，学会で拙論を発表した。

『大学ランキング'95』（共著，1994年，朝日新聞社），『大学評価－文献選集』（共著，2003年，エイデル研究所），『大学評価の展開』（共著，2004年，東信堂），『現代社会と大学評価』（共著，2008年，大学評価学会）。

（3）私立大学時代

広大では，「21世紀 COE プログラム」の拠点リーダー（2002～2007年）の5年間の任期を果たす必要があることとの関係を勘案して，2年間ほど特任教授に任用された結果，従来の定年63歳制度を見直して65歳で退職を迎えた。その直後に任用された比治山大学を嚆矢に，くらしき作陽大学，兵庫大学に連続して奉職した期間は16年間（2007～2023年）に及び，すべて私立大学となったのは私の学者人生では初めての体験である。それまでの大教大，広大で過ごした37年間が国立大ばかりで国家へのコミットメント，今度は私大ばかりの法人へのコミットメントとなって対照的となったのである。国立大は法人化（2004年）の以前では「親方日の丸」の管轄下にあり国庫からの費用の占める割合が多く，それに対して私大は授業料に依存する割合が多いとの顕著な違いを呈したのは周知の通りである。その後私大の状況は大同小異のままに推移し，授業料の比重は一段と増したのに起因して，定員割れが拡大した私大の中でとりわけ小規模大学は次第に存亡の危機に見舞われる局面に入る羽目になった。

国立大は2004年の民営化を起点に「運営費交付金」が運営の命綱になったにもかかわらず，その後14年間に毎年1% ずつの目減りが進行し1,400億円もの減退を惹起したため予想にたがわず大学運営が逼迫し，教育研究のアウトプットが衰退せざるを得なくなったのであり，この事実もまた周知の通りである。最近では国立大は「成果を中心とする実績状況に基づく配分」に移行し，私大では「私立大学改革総合支援事業」に移行し，いずれも政府による競争的資金配分が強化された。1990年代から経済の「空白の30年間」が持続し，国公私大はこぞって経営的に厳しい状態に突入した結果，その煽りを受けて，次第に教育研究の量的発展は固より質的発展が麻痺し始めたと言っても過言ではあるまい。経済的に「貧すれば鈍する」と言われる通りである。この時代には日本人の幸福度が下降線を辿って，遂には国連幸福度ランキング（2023年）では，137国・地域の中でフィンランド，デンマーク，アイスランドなどが上位を占める中で，日本は47位に低迷しもはや先進国ではない状態まで失墜した。日本の国が悪循環に陥り，日本症候群が進行している限り，大学はそれに翻弄されるだけではなく，日本再建への貢献が問われる度合いが日増しに高まる時代に入った。ちょうどその時代に，国立セクターを定年退職して，3私立セクターに順次奉職したために，大学が次第に衰退する状況を参与観察する巡り合わせになったのは感慨無量である。

①比治山大学

最初の比治山大学では，所長として招聘された高等教育研究所を拠点に4年間（2007～2011年）

勤続し，従来からの研究を持続した。その傍らで，かねて国立大学を対象に設置した「全国大学教育研究センター等協議会」（1996年設置，会長2001年まで）と同様の組織を今度は私立大学を対象にした「全国高等教育研究所等協議会」としてスタートさせ，その後兵庫大学での退職時に閉じるまで14年間の長きにわたって会長として牽引する運びになった。設立発起人の有本章，江原武一，馬越徹，濱名篤，山田礼子は理事を務め，馬越，江原の逝去後に山本眞一が後任の理事を務めた。

研究所では紀要『比治山高等教育研究』を4巻出版し，協議会では『ニューズレター』1号を出版した。この時期は，私学での研究所や協議会を創設した点では，広大時代の国立目線から私大目線に目線を動かさざるを得なくなったと実感するとともに，どちらかと言えば中小規模の私大が定員割れに四苦八苦する点を追跡する立場に立ったから否応なしに私大目線の比重が増したかも知れないけれども，研究内容自体の枠組みはセクター移動に左右されることなく学問的に大同小異の視点を継承したと言えよう。しかし経済の「空白の30年間」が1990年から開始されたとすれば，私立大学に奉職した16年間はその後半部分の試練の時代にもろに直面した大学が，①「理念の時代」②「量的発展の時代」③「質的発展の時代」を経由して④「淘汰の時代」に入ったというほかない。

この期間を通して，政府や内閣の高等教育や学問への投資と質的保証が後退したために，各種の研究で縷々実証したように，大学の研究・教育・学習（学修）の実力が見る見る衰退し，国際的な日本の大学の地位が失墜する羽目になったのである。政府は赤字を累積させる一方で，過去最大の114兆円（2023年）になるまで異常に予算を拡大させ，防衛予算には拡大の一途を辿らせているにもかかわらず，国家社会発展の基礎基本たる人材養成への予算投入を疎かにし，とりわけ肝心要の学問への投資を怠ったために，大方の大学はかつての「大学の棺桶」を想起させるまで目を覆いたくなるほどの疲弊を余儀なくされ，大学の国際的水準は後退基調を日増しに加速しているのは，日本の先行きを危惧せざるを得ない赤信号そのものを意味するのである。

高等教育研究・大学教育に関する研究

比治山大学時代に当該研究領域で手掛けた主たる著書（単著，編著，共著「分担執筆」）には下記のものがあるが，中でも中国の大学との交流から生まれた著作がある。中国杭州師範大学の将来構想計画を競う国際コンペへ参画して，図らずも「国際優秀賞」を受賞（2008年）したのはその一端を示す。中国の大学はこの頃から経済発展や進学率の拡大を反映して瞠目すべきほどの急速な発展を遂げたのを踏まえて，自信をつけて活動を活発化する動きを顕著にしたと言える。受賞と言えば，東アジアの高等教育研究に参画して共同研究を行った結果，共著『Crossing Borders in East Asia Higher Education』の刊行（2010年）によって，前作同様に CIES の「最優秀出版賞」に輝いたのもこの時期である。また国家発展に果たす研究大学と国家の関係を体系的に研究した国際共同研究は，かねてからの知人であったディビッド・ディルが主宰し，国際的に著名な研究者が参加してジョンズ・ホプキンズ大学出版から出版（2010年）された。

『中国杭州師範大学2009-2025』（編著，2008年，比治山高等教育研究所）〔国際優秀賞〕，『大学教育質量的理論と実践研究』（共著，2009年，広東高等教育出版社），『Crossing Borders in East Asia Higher Education』（共著，2010年，Greenwood Press）［CIES 最優秀賞］，『National Innovation and the Academic Research Enterprise: Public Policy in Global Perspective』（共著，2010年，The Johns Hopkins

University Press)，『比較教育ハンドブック』(共著，2011年，東信堂)，『As The World Turns: Implications of Global Shifts in Higher Education for Theory，Research and Practice』〔Advances in Education in Diverse Communities: Research，Policy and Praxis，Volume7〕(共著，2011年，Emerald Books)，『The Emergent Knowledge Society and the Future of Higher Education: Asian Perspective』〔Comparative Development and Policy in Asian Series〕(共著，2011年，Routledge)。

大学教授職論

当該領域は，2007年からCAP国際研究がスタートしたので，その成果を2008年の日本版と2011年の世界版とに逐次発表した。いずれも1992年時点のカーネギー調査と比較して「研究と教育の両立」志向が後退して，「研究志向」が躍進した事実を発見した点で意義があるし，その後この傾向が今日まで強まったのがその間の特徴である。ネクサスが研究志向へ収斂する傾向は，①2003年以来開始された世界大学ランキングが引き金になって国家，大学，大学人の研究志向を促進していること，②大学教育が研究を担保せず，教育から研究を離反させて大学の固有性である研究と教育の両立を阻害していること，③学生の学修との繋がりをますます疎遠化していること，等々を図らずも浮き彫りにしたのであるから，世界的に米国を除くとネクサス論の実現から後退したと言わなければならない。なおこの時期には外国での出版には，ケンブリッジ大学出版からの学術誌出版(2010年)があるとともに，FD論の中国版が復旦大学から出版(2011年)されたことが想起されるが，外国での翻訳ではかつて有本・江原編著『大学教授職の国際比較』の韓国版が出版されたのに続く成果である。

『変貌する日本の大学教授職』(編著，2008年，玉川大学出版部)，『高等教育』(共著，2010年，日本図書センター)，『European Review：Diversification of Higher Education and the Academic Profession』(共著，2010年，Cambridge University Press)，『変貌する世界の大学教授職』(編著，2011年，玉川大学出版部)，『大学教授職とFD－アメリカと日本』〔中国語版〕(単著，2011年，復旦大学出版社)。

教育社会学論

教育社会学の研究と銘打って刊行したのは『教育社会学概論』(2010年)であったものの，教育社会学者として自認して以来関与した著作は，教育社会学と銘打たずとも方法論的には大同小異の色彩を帯びたたはずである。作陽大で担当した教育社会学の授業ではテキストとして使用した。『教育社会学概論』(共編著，2010年，ミネルヴァ書房)，『比較教育学事典』[日本比較教育学会編](共著，2011年，東信堂)。

大学ランキング

「大学ランキング」は2003年から開始され約10年が経過した時点ではその正体が鮮明になってきたため，国際的に関心が高まり，賛否両論の論調が展開され始めた。その種の状況に関する考察を『University Rankings』(2011年)において行ったし，日米比較を基に米国の優位性を検討した。以前にも『大学人の社会学』(1981年)で逸早く詳論したごとく，1920年代から助走を始めていた米国は，1960年代から本格的に国内のランキングに工夫を凝らして飛躍的な発展をもたらした結果，その効果がそのまま国際ランキングへと接続して米国方式の方法論が席捲する状態が出現したし，それは他の国々からは看過できない動きとなって，追随を模索し始めた。その点では日本は出遅れ

たばかりか，それを挽回する取組みも遅々とした足取りであるが故に上昇に転じるどころか次第に後退を余儀なくされているのが偽らざる実情である。

『University Rankings』（共著，2011年，Springer）。

学問論

この時期に刊行された学問論は，『大学と学問―知の共同体の変貌』（共著，2010年，玉川大学出版部）に掲載された論文である。

R-T-S ネクサス論

そもそも「ネクサス論」は，フンボルトが提唱した時点（1910年）では，その実現が「夢」の段階であり，100年経過した現在は，上記のように世界的に研究志向へ収斂する傾向が強まっているので，夢を実現させる「希望」の段階が進捗捗々しくなく苦戦を強いられているのであり，「実現」は明日に延期されざるを得ないと見做される。そのような世界的状況の中で日本に照準して2010年に発表した拙稿「Differentiation and Integration of Research，Teaching and Learning in the Knowledge Society: from the Perspective of Japan」（Keynote paper presented to CAP International Conference，Jan. 2010）は，ネクサス論に本格的に着手した論稿となったものであり，その後連続的に論稿を発表する契機となった点で重要である。「The Changing Academic Profession in International and Quantitative Perspectives: A Focus on Teaching & Research Activities」（共著，2010年，RIHE，Hiroshima University）。

②くらしき作陽大学

高等教育・大学教育の研究

くらしき作陽大学（以下，作陽大）には五年間奉職した中にあって，8年程度の継続を期待されて就任した学長職を僅か2年で辞任した理由は，大学教員の目的に関する見解が理事長と折り合わないため学長続投は無理だと判断したからであるとともに，学長は何かと雑務が多く研究との両立が困難だと就任早々直感したからである。この判断は，その後特に兵庫大学時代を含めて国内的にもとりわけ国際的にも少なからぬ研究の仕事に専念できた点を考慮すると，われながら運命を変える上で正鵠を射た決断であったと今にして思うところ大である。

学長自身は，学生が自主的・主体的に自分の頭で考えて学問や人生に取組み質的に深い学力を形成すべきと考えるのに対して，理事長自身はとにかく学生が多くの単位を履修して卒業するのが本人にも幸福だし親御さんにも親孝行だと見做し，概して量本位の考え方に固執した点で対照的である。学生本人にも両親にもかかる教育観が魅力的であると信じて疑わず，それを押し通せば多くの受験生を確保できると疑わないから，経営的にはまだしも大学本質論からは浅ましい哲学に依拠しているのであった。加えて，卒業に必要な124単位内で深く学修するのではなく，200単位以上を履修するのを奨励したし，実際にその種の履修者を多出していた。多数の単位履修は就職にも有利に働くとまことしやかに学生のパトロンである父母に喧伝して信じさせる。浅く広く学習する学生を褒めそやして譲らない方針は「大学教育とは何か」の本質に疎い素人の本性ではないかと危惧させるほど拙劣であったというほかない。立花隆の『東大生はバカになったか』（2001年）に出てくる知識を丸暗記する「湯飲み茶わん」と化した受け身的な学生と同じ観点を踏襲しているのである。

この種の多数の単位履修に走る学生は，例えば1科目の履修には1時間の授業に対して，1時間の予習と1時間の復習が必要だとする設置基準を遵守できるはずがないから，諸科目を広く浅く学習しても深く掘り下げて学修する習慣は身につかない。それは設置基準を蔑ろにする日本の大学教育に特有なアキレス腱である。それは物知りをよしとする世間の風潮に迎合し，大学の真髄を見損ねているとしか思えない。

米国から輸入して制度化した設置基準のごとき大学の公共性を遵守せずに，無視して形骸化させ私物化する発想は「学問の大学」のそもそもの真髄から逸脱しているし，「学問を大切にする」という中世大学の「学問ギルド＝ Universitas」以来追求されてきた大学固有の理念を大事にする精神は毛頭見られない。中世大学以来の伝統を踏襲している「学問の大学」を追究する英米の大学とは異なって「国家の大学」に特有な偏差値中心の詰め込み主義教育を追究するという陥穽に陥っていると言わざるを得ない。明治時代以来踏襲されてきたこの種の日本的風土に根差した考え方は，必ずしも理事長一人のみに帰す考えではなく，多くの人々に共通に見られる「常識」なのかもしれないが，学長には見逃せない「非常識」であるし，それの実行は学生のスポイルに他ならない以上，見直すしかなかろう。「学問の府」たる大学教育を質的に掘り下げて追究するのではなく，偏差値で人間を輪切りにして選抜して国家に量的に従属させる量本位主義の大学教育観が跋扈している文化や風土こそが問題視されない限り，空気のように現在の大学を支配している常識は百年河清を待つごとく変わらないのに違いない。この手の大学が支配する限り日本の大学は究極的には発展しないと憂慮せざるを得ないばかりか，それにとどまらず，その種の学力を基本的に集成して成り立つ学問生産性のアウトプットでもって，例えば世界大学ランキングでの「学問生産性」の「先取権競争」（priority competition）に参画しても，これまでの実績が証明している通り日本の大学の上位進出は困難だと危惧せざるを得ないのである。

当該領域で手掛けた著作には，関西国際大学の学長（濱名篤）を中心に数大学との共同研究の一環として発表した「主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築」という研究成果報告書［文部科学省大学間連携共同教育推進事業］（編著，2014年，KSU 高等教育研究センター）が含められる。だがイノベーションを試みんとする考えを理解できない理事長の考えと齟齬をきたして，せっかくの実験的な研究が途中で頓挫を余儀なくされたのは不本意至極であった。なお，この時期には，引き続き東アジアの高等教育の発展を追跡したのに加え，特に特筆すべき出来事はこの時期に私とゲリー・ポストグリオン（香港大），ヨンチョル・シン（ソウル国立大），ファン・フタオ（広大）が中心になって「HERA ＝アジア太平洋地域高等教育学会」を立ち上げたことである。やがて私が代表の役割を仰せつかったので所期の精神に則って発展に尽力することが何よりも重要であると銘記して活動を展開している次第である。

大学教授職論

「大学教授職論」と「ネクサス論」は近い位置に存するので，必ずしも別々のカテゴリーに分類する必要はないかも知れないが，一応区別してみると一つは下記の研究を持続した。二つは，シュプリンガー社でウィリアム・カミングスと共にシリーズ編集長を担当して16点出版した著作に該当しており，この時期の2点では前者を私が筆頭編者として編集した。

『Changing Academic Profession in Japan』（共編著，2014年，Springer），『Bibliographies and Careers throughout Academic Life』（共編著，2015年（平成28），Springer）。

R-T-S ネクサス論

大学教授職に照準する限り学問論とネクサス論は表裏の関係を構成し，合わせ鏡の関係になっていることが分かる。英文共編著『Teaching and Research in Contemporary Higher Education』（2013年）では私が巻頭論文を書いてパイロット役の責務を果たしただけに，図らずも最優秀賞出版賞受賞の栄誉に輝いた時に長年当該領域を倦まずたゆまず開拓してきた甲斐があったと痛感したのは，自分では正当な判断だと信じたい。他の著作もネクサス論との関係が深い。

『Teaching and Research in Contemporary Higher Education; Systems，Activities，and Rewards』［CIES2015年度最優秀賞受賞（図書部門）］（共編著，2013年，Springer），『The Future of the Post-Massified University at the Crossroads: Restructuring Systems and Functions』（共著，2013年，Springer），『The Relevance of Academic Work in Comparative Perspective』（共著，2014年，Springer）。

評価研究・外部評価

評価研究では，かつて宮崎国際大学（1996年），神戸大学（2001年）などの外部評価に関与した経験があるので前歴があるのであるが，この時期では京都大学（2013年）や大学基準協会（2014年）の外部評価に関与したのであり，その経験を通して高等教育研究センターや評価機関が曲がり角にさしかかり存亡の危機にあることを確信したのは決して虚言ではない。実際，京大のセンターはやがて終焉（2022年）を迎え，同様に筑波大学のセンターも終焉（2023年）を迎えた。だがそのことは，大学がIR= 自己研究を大切にしない風潮が頭を持ち上げているのではないか，と憂慮される現象の一端を如実に示していなければ幸いである。

『2013年度京都大学大学院教育学研究科・教育学部自己点検・外部評価報告』（共著，2013年，京都大学大学院教育学研究科・教育学部），『大学基準協会外部評価結果報告書：大学基準協会の歩みと展望―高等教育の質的転換を求めて』（共著，2014年，大学基準協会），『大学評価論の体系化に関する調査研究』（共著，2014年，大学基準協会）。

研究大学・大学院の研究

大学院の博士課程に焦点を当てた国際研究を手掛けた仕事には次の共同研究がある。『Doctoral Education for the Knowledge Society: Convergence or Divergence in National Approaches?』（共著，2017年，Springer）。

大学ランキング

安倍首相が10年間に10大学を上位100傑以内にエントリーさせると豪語したのに，現実には僅か2大学留まり，全体的にはランキングを低下させたのは，上記の大学ランキングの項目で述べたことの顛末を物語っている。実際，その点は拙論「世界大学ランキングにおける日本の研究大学の学問生産性と将来展望」（2016年）にて予測した通りの結果となった。最近10兆円の巨額を投じて「卓越研究大学」（2023年）を立ち上げたが，上位層の大学のみに巨額の研究費を投資しても，運営費交付金の目減りから衰退した国立大の中堅大学の底上げや私大を含めた多数の底辺層の大学の底上げを真剣に措置しない以上，世界大学ランキングの上位への進出は果たせない夢に終わるのではな

かろうか。その点，世界的に注目度を高めるには，最近では論文数や引用数がものをいう時代になり世界的に著名な学術誌に投稿して採択されないと見える化が出来ない時代になった。これら学術誌はネイチャーやサイエンスなど講読料が値上がりしているから，資金力のある国や大学に所属しないとうだつが上がらない。日本の大学が大学ランキングの上位に進出するためには，特に国や政府にとって「10兆円ファンド」の使い方に見られるごとく「選択と集中政策」のみではなく，むしろ底辺の底上げが可能になる政策が不可欠の課題となっているのである。忌憚なく直言すれば，政府の政策は失敗したのであるから，屋上屋を重ねる愚策を放棄しない限り，日本の将来は危うい。放棄して出直す。そうでなければ，中堅以下の大学が早晩枯渇を余儀なくされて再起不能になることが懸念される。

「世界大学ランキングにおける日本の研究大学の学問生産性と将来展望」（2016年，『KS 高等教育研究』，第4号）

教育社会学論

恩師の新堀が92歳で身罷った（2014年）のを機にその間に残された膨大な業績を惜しんで「追悼集刊行委員会」から『新堀通也，その仕事』（2015年，東信堂）として生涯の仕事のメタ評価が刊行されたのを機会に一部所見「新堀先生を偲んで」を寄稿した。長い研究者生活を回顧すると教育学からスタートして学位論文のデュルケーム研究を皮切りに教育社会学の学問論をライフワークとして究め，最後はまた教育病理学に近い臨床教育学を唱道して教育学に回帰したとの印象を与えずにはおかない。全7巻の著作（2014年，学術出版会）には私の座右の銘として頂戴した「着眼大局　着地小局」を文字通り忠実に実践した軌跡が髣髴と窺えたのであるから改めて巨星墜つとの感慨を覚え，初心を見事に貫徹した学者人生は流石だと改めて感服した次第である。

『新堀通也，その仕事』【新堀通也先生追悼集刊行委員会編】（共著，2014年，東信堂）。

③兵庫大学

兵庫大学では2016年4月から学長顧問に招聘され，新設の「高等教育研究センター」のセンター長として赴任して，2023年3月まで7年間奉職した間に種々の貴重な経験を享受できたと言える。全国の中小規模の私立大学，とりわけ入学定員800人以下の小規模大学は，御多分にもれず定員確保に四苦八苦している最中であったのは偽らざる現実そのものであったし，私の役割も何とか大学改革によって再建を図ることが切望されたのは間違いない。しかし従来から持続してきた高等教育研究は普段と変わりなく，作陽大時代と一変して学長と研究者の二足草鞋から解放されて，研究者像を自認しつつコンスタントに仕事を持続した点では本来のアカデミック・キャリアに復帰したのであり，その意味では研究者としては所期の目的を日々コツコツ地道に追究するという，何の変哲もない当然至極の日常であったのではあるまいか。比治山大時代から開始して緒に就き9年間持続した「高等教育研究所」は，すでに「総合科学研究所」が実在してバッティングするとの理由で回避を余儀なくされて，止む無く「センター」の名称にした経緯がある。研究所がセンターに名称変更したのと呼応して所長からセンター長へと看板が代わった以外は，内容的には従来と何も変わらない仕事に専念したと言ってよかろう。比治山大以来，私学に勤務した16年間，高等教育研究所（セ

ンター）を主宰したのは偶然とはいえ内外における種々の共同研究を行う拠点を形成できた点で幸運であった。

しかし，広大を定年退官後に心機一転して私大へ奉職した16年間持続した活動の中心は，もちろん研究，教育，サービス活動を行ったとはいえ，あくまでそれらは研究所（やセンター）を拠点に展開した以上，そこでの活動が私のアカデミック・キャリアに占める比重が質量ともに大きいのは確かである。したがってその間に一体全体何を遂行したのか，その活動を HU ＝兵大のセンター活動を基軸に集大成的に述べる必要があろう。主たる活動は，①大学の使命，役割，機能，構造などの理論的研究，②兵大の IR 装置としての現状の診断と処方，③各種研究会，セミナー，会議の開催，④紀要や出版物による公表活動，⑤全国高等教育研究所等協議会（以下，協議会）の会長と事務局の仕事の推進，等々の仕事に包括できる。仕事担当の延べ人員は合計28人（専任3人，学内併任研究員12人，学外客員研究員11人，職員2人）を数え，講演会等講師は国内外から延べ23人を数えた。

諸活動は大別して3領域（3層）に分かれた。第1は学内活動。「2018年問題」との関係で，定員割れ阻止のため質保証の徹底を画策し，IR の視点に照準して，エンロールメント・マネジメント全体を対象にして，特にスループットに焦点を合わせた活動を展開することは焦眉の急を要した。学長裁量経費を得て「学士課程教育の質保証」の追究を手掛け，教員，学生，生徒の意識調査を実施して「学士課程教育の質保証に関する研究」全6巻（Ⅰ～Ⅵ）として刊行し，併せて成果を集約して大学への政策提言を行った。同じ大学にアングルを据えて7年間の軌跡を追った定点観測の仕事であったが，基本的には教員目線と学生目線の乖離状態を追跡したところに特徴が見出される。平行して，講演会，研究会，研究員集会をはじめ，センター紀要全7巻，センター・ニューズレター全13巻，協議会・ニューズレター全14巻（兵大では7巻），HP 論稿全130点，などを刊行した。ちなみに著作に関しては，『教育社会学辞典』（共著）を出版した時点（1967年）以来今日（2023年）までの通算56年間では，著書（単著，共著［分担執筆を含む］，編著等）140点，論文1,000点以上を出版しており，「塵も積もれば山となる」の謂いの如く量的に嵩んでいることには，今更ながらに驚かされている次第である（拙稿では主たる著書は別としても論文への言及を原則的に控えていることに鑑み，業績内容の説明が舌足らずになっていると懸念している。）

第2は国内活動。私は従来からの活動の延長上で，「協議会」の会長と事務局を引き受けて都合14年間（兵大では7年間）活動を持続して私立大学の発展を期すためにその「理念と現実との葛藤」に対処する活動に焦点を合わせた。中世大学以来追究されてきた理念の追求が社会変動に翻弄されて如何に困難であるかを身をもって体験した。

第3は国際活動。上述の事柄と関係するが，カーネギー，CAP，APIKS など大学教授職に関する国際共同研究を1991年以来日本代表として持続し，研究成果をシュプリンガー社にてウィリアム・カミングスとともにシリーズ編集代表の仕事（16巻出版）によって発表した。もし兵大で研究者を持続する幸運がなければ，このような国際活動の機会は得られなかったはずであるから，降って湧いた僥倖であった。同じく，科研費（基盤 A・B）を得て国内外の共同研究を展開した他に，HERA（アジア太平洋地域高等教育学会）代表や CHER（欧州高等教育学会）会員など学会活動をはじめ，国際共同研究，客員教授，学協会講師，等々，国際交流活動を行った。

ちなみに教育研究活動の中の特に研究活動のアウトプットでは研究費取得の有無が左右する。その点，生涯に取得した科研費は日本学術振興会の基盤 A/B などをはじめ大小52件（兵大では7件）を数えたのは幸いである。これら有形無形のバックアップのお蔭で以て52年間務めた大学を基軸に国内外での諸活動に対しての表彰を忝なくした。例えば全国社会教育連合会長表彰（2018年），広島県教育賞（2019年），文部科学省社会教育功労者賞（2020年）等の受賞，叙勲では瑞宝中綬章（2022年）の受章などがある。

なお，これらの3層構造にわたる活動を通して追究した課題は，主として「大学理念と社会変化の要請から生じる葛藤」をいかに止揚して大学の発展を可能にするかに主眼があったと言うべきである。「大学理念」は，12・13世紀に台頭した中世大学の原義たる UNIVERSITAS ＝学問ギルド（組合）でもって緒に就き，主に「学問の発展」の促進活動を介して社会発展への貢献を標榜したし，この大学理念は，グーテンベルグの活字印刷術の発明の後に生じた，大学衰退の時期を経過して後に近代大学によって蘇生し，大学の活動を推進する原動力の役割を果たすことになった。現在では，「学問の自由，自治，R-T-S ネクサス」といった所期の大学理念を如何にして標榜するかは個々の大学にとって不可欠の課題となった。その点，中教審が最近の答申等（2018年，2021年）の中で「学修者本位の教育」「研究と教育の両立」を提唱する運びになった事実を勘案すると，日本では漸くフンボルトモデルが追求した近代大学理念が注目される時点を迎え，「ネクサス，徳性涵養，学問の自由」の三点セットの中の最初の「R-T-S ネクサス」が重視される段階を迎えたことが分かる。最近の7年間を含め都合16年間の研究所・センターを拠点に追跡してきたこの種の「大学理念」と大学を取り巻く環境変化との角逐の動きがセンター終焉後に如何なる展開を示すかは端的に言えば少なからず懸念されるところである。

高等教育・大学教育の研究

この時期に最初に手掛けた，『大学教育再生とは何か』（2016年）は，大学教授職の日米比較をベースに置いて，両国の大学教育に19世紀以来150年間に相違が生じた背景と原因を教育社会学，大学史学，比較教育学などの方法論を活用して追跡的に究明した点に特徴が見出される。日米の相違が生じた点を縷々考察したことを踏まえて，「両者の岐路を生んだ原点に立ち帰り，大学教育再生の座標を明確にする自覚から再出発するしかないだろう。そうでなければ日本の大学や社会は黄昏に向かうのではあるまいか。」と総括した。

この時点ではアジア諸国において博士教育と大学教授職の関係も重要な領域となって注目を集めたし，特に日本における博士課程進学者の減少は大学教授職の質的後退をもたらすのは必至であるとの予測を喚起したし，この予測は最近では一段と深刻の度を深めているのは看過できない。さらに以前から持続している AP の国際調査研究は，CAP 調査や APIKS 調査をベースに大学教授職の国際比較を行って，日本の大学教授職の長所と短所を解明する仕事を試みつつある。

兵大では以前から手掛けてきた「東アジアの高等教育」の内容を共著（2017年）のごとく持続的に研究している。また「Universities in Knowledge Society」（2021年）に関する研究は，APIKS の主題に対応した国際比較であることからして，このプロジェクトが持続する間は大なり小なり取組む主題となると見做される。日英の文化と高等教育を射程に入れた「Cross-Cultural studies」の比較研

究も広い意味ではこの領域に属する。最後の著書『学問生産性の本質―日米比較』(2022年)は，750頁の浩瀚な書物であるごとく学問論と大学教授職論の交差する領域にメスをいれて論稿を試みた，従来の研究の集大成とも言える性格を有している内容を有する。言ってみれば「学問生産性の本質」を科学社会学の視点から究明し始めて辿り着いた到達点を歴史学的，比較学的，社会学的に総括する試みであると我田引水的に位置づければ，教育社会学から他の学問領域の境界へとやや意識的に越境を試みた側面を有し，その意味から種々の論点を包括した著書であると見做される。先行した『大学教育の再生とは何か』(2016年)を踏まえて，ドイツモデルを移植して，近代大学を構想する明治時代の時点で，片や大学の本質あるいは学問生産性の本質を理解して中長期を見通す視座を踏まえて「学問の大学」を創造した米国と，片や本質を理解せず専ら近視眼的な視座から「国家の大学」を創造した日本とは，戦前戦後の150年のスパンの間に埋めがたい距離をもたらしたのは偽らざる事実であるから，もはや簡単に取り戻せない失敗であると総括すれば，失われた時間は度し難いほど大きいと惜しまれる。それとともに，巨視的視座から高等教育研究を手掛けて国際比較研究を行うと同時に，空白の30年間に正体を露わにした「日本症候群」に社会学的アプローチのメスを入れた営みは重要であろう。今指摘した日本の大学が形成した戦前以来の特徴は，今日の学問生産性における国際的な衰退と密接に関係していることは論を俟たない。

『大学教育再生とは何か―大学教授職の日米比較』(単著，2016年，玉川大学出版部)，『Doctoral Training and Academic Profession』(共著，2016年，Springer)，『Higher Education Governance in East Asia: Transformations under Neoliberal Reforms』(共著，2017年，Springer)，『大学事典』(共著，2018年，平凡社)，『Universities in the knowledge society: The nexus of national systems of innovation and higher education』(共著，2021年，Springer)，『Cross-Cultural Studies: Newest Developments in Japan and the UK』(共著，2022年，World Scientific)，『学問生産性の本質―日米比較』(単著，2022年，東信堂)。

学士課程教育の質保証

領域的には従来から手掛けてきた当該領域の一翼を占めながらも，主として授業，あるいは「教授―学修過程」に焦点を合わせて研究したのは，学長科研(学長裁量経費)を得て推進した「学士課程教育の質保証に関する研究」である。当該研究は，兵大への奉職が実現してこそ結実した成果であり，とりわけ小規模大学の一点に集中して定点観測を試みて得られた類例を見ない貴重な成果であると言ってよかろう。

上記のセンター活動の中で述べた通り，HU 時代(2016～2023年)の7年間を「学士課程教育の質保証の研究」に集中的に取組み，『学士課程教育の質保証に関する研究』全6巻［Ⅰ～Ⅵ］(編著，2018～2023年，兵庫大学高等教育研究センター)を刊行したのは特筆に値するのであり，私の大学教育研究では定点観測によって私立小規模大学の現状を掘り起こした点に真骨頂があると言ってやぶさかではあるまい。上述の通り，一人一人の学生が自主的・主体的に学問や人生に取組み，借り物ではなく自分自身の頭で考え抜き行動するようになるために，大学教育は偏差値教育に安易にのめり込むのではなくあくまで質保証に徹して十分な質的成果を上げる必要がある。その観点に留意して，他大学や高校との比較研究を行いながら一私大にアングルを据えて7年間の軌跡を定点観測した意味では，内外にあまり類例がない独創的な研究に値するだろう。

特に重要な研究結果の一つは，数年間にわたって「教員目線と学生目線の間の乖離」が縮小せず終始した点にメスを入れた営為に見出される。教員は自分の授業が最高に優秀だと確信して譲らず，その授業を受講した学生の学力は当然高いと確信して疑わないのに反して，学生の学力に対する教員の評価は何故か低いと判明したのである。かかるギャップが存在するのならば，教員自身がそのことを自覚して授業に創意工夫を凝らして学力向上を図るのが当然の筋道のはずであるにもかかわらず，この側面が看過される傾向があるのはなぜか解せない。いくら優れた授業を行ってもこのギャップを客観的なエビデンスでもって他者に見えるように改善しない限り，「学士課程教育の質保証」は実現しないままに終わる。

何故改善されないかその原因を詮索すると，概して教員の出自は格差社会の中上位層なのに対して学生の出自は下位層であるとの相違がこの種の乖離を生む原因になっていると推測できよう。教育社会学は「教育に具現した社会的事実」を研究する学問である以上，この社会的事実は教育の質保証を考える場合に避けて通れない。今後「2018年問題」の絡みで中小規模の私大，とりわけ小規模私大の淘汰が高まるとシミュレーションでもって予測される中で，小規模大学に顕著に見られる地域社会からの入学者が多い現実と照合すると，これらの大学が淘汰される可能性が存外高いばかりか，実際に淘汰されれば多くの学生が母校を失うのはもとより，それに留まらず教職員が行き場を喪って路頭に迷いかねず，同時に輩出母体の地域社会が人材枯渇の問題に早晩直面せざるを得なくなるのは回避できない，という悪循環の発生が容易に想定しうる。

大学の本質と直接関係が深い授業の現場で生じている教員と学生の乖離の事実は，大学の理念の追求が疲弊している証拠の一端を如実に物語るのではなかろうか。教員は実体調査の結果を突き付けられて初めて問題の所在を察知する次元に至ったのに違いない。そのような教育遅滞が生じないためには，教員はそもそも何のために存在するのか，実証的に真実を把握することを通して教員に課せられた使命が真剣に問い直され得るはずだし，そのことを通してこそ教育の専門職に内在する持ち前の潜在力や地力を発揮して学生の低学力傾向の底上げを図ることが可能となるに違いない。そうした営みを喪失すれば，日本の大学は一人ひとりの学生をして学力の高い人材を養成するのに不可欠な教育力自体を失い，世界的にも教育力の実力発揮において後塵を拝することにならないとも限らない。

大学教授職論

国際比較研究をカーネギー調査以来30年以上持続してきた，「大学教授職論」は編著（2022年）の共同研究に踏襲して，日本の問題点や課題を分析した。また作陽大で焦点化した「ネクサス論」を継承して以来，特に論稿「研究と教育の両立」（2023年）は，中教審の答申等による提唱（2018年，2021年）と関連して，日本の大学教授職におけるネクサス実現の困難性に焦点付けて論じた点で私自身の最近の問題意識と関係が深い。従来からの国際比較研究を踏まえて，日本の大学教育政策が国際的に立ち遅れを来した不幸な側面を掘り下げて考察したことに鑑みると，先述の「大学教育論や学問論」を敷衍して「ネクサス論の本質」を俎上に載せて縷々探究した意義が大きいはずである。最後の著書『Internationalization and the Academic Profession』（2023年）は，カナダ，フィンランド，ドイツ，日本，リトアニアの国際共同研究であるけれども，日本の大学教授職の国際化を

論証する視座に立脚したアプローチに照準すると，世界的に日本の国際化は立ち遅れた袋小路に陥ており，早急な打開策が欠かせないことを浮彫りにしていると見做される。

『大学教授職の国際比較―世界・アジア・日本』（編著，2020年，東信堂），『Teaching and Research in the Knowledge-Based Society』（共著，2022年，Springer），「研究と教育の両立―日本の大学での困難性」（単著，2023年，『兵庫高等教育研究』第7号）。『Internationalization and the Academic Profession：Comparative Perspective』（共著，2023年，Springer）。

教育社会学論

教育社会学会に入会して，教育社会学を学問的に追究する集団の一員になった時点からこのかた，私自身が教育社会学者の自己像を描くことによって所期の目的に向かって邁進する営みを開始したと回顧すれば，それは20歳代から今日まで60年も持続した長い営みにほかならない。その間に試行錯誤の道程を辿ったことを顧みると，自分の学者としてのアイデンティティは確かに形成されたと密かに自負しているところが多分にあるとしても，かかる集団の中や他の学問領域に属する研究者が私自身の学者像や研究者像をどのように描いているかはそれとは別個の問題である。それは簡単には把握できない領域に属しており，「鏡に映った自分」の像を手探りで知るほかは方法がないのにも等しい。その点，3人（竹内洋，藤田英典と私）が顧問として参画した『教育社会学事典』（日本教育社会学会編）（共著，2017年，丸善）は，他の学会員と共同して，教育社会学像を構築する作業に参画していることの証左であると言わねばならないし，その点で示唆的であると言えよう。この現象は教育社会学の学問的完成は一朝一夕には成し遂げられない仕事を物語るのは固よりだし，一人の学者が何か特別に卓越した仕事を成就するのは存外困難な事実であると物語っているのでもある。

同時にそのような学問の本質や理念を追求する活動は，何歳になっても創造的活動の一翼を担う行為として有意義であるのは無論であるから，独創性や創造性を重視する「学問的先取権」の観点に照準して一人ひとりの研究者の活動を追跡すれば，自から優れた研究が達成されたか否かメタ評価的に検証できるに違いないのであり，教育社会学の同業者が個々の研究者の活動を如何なるイメージで把握しているかは，価値ある指標の目安となろう。その点，私の過去の活動に即した功罪は『教育社会学の20人』【日本教育社会学会編】（共著，2017年，東洋館出版）において，図らずも「20人」の一人に選ばれてインタビューを受けた事実に集約されていると見做し得るだろう。このことに注意を向けて，学問のゴールキーパーたるレフェリーはその目を通して「或る一人の研究者」を「アカデミック・プロフェッション研究」の専門家として評価していると捉えれば，次の感想を抱かざるを得ない。すなわち，学位論文を書いた時点で大学教授職を主題にしてライフワークとして取組む決意を宣言したのを想起すると，以後の業績に刻印された軌跡は長年にわたって大学教授職論を追究したことの実績となって具現している何よりの証拠にほかならないわけである。しかもそれが当時の決断とその後の業績が相俟って教育社会学の学問的発展に微力ながら貢献したと意味していると解するのが妥当であるとするならば，修業中の研究者が当時において直面した岐路の選択をめぐって躊躇なく下した決断は，それなりに的を射ていたことになると見做されるのであろう。

第5回　若い高等教育研究者への期待

ひと昔前に，ある彫刻家（平櫛田中）が「70・80は洟垂れ小僧」と言った謂いからすれば，70・80歳といえどもいまだ年輩の域に入りそうにない。かく言う私は平素からいまだ若輩者と思っているので，若い方々に何か期待するというメッセージを発出するのは，おこがましいしお門違いの気持ちがあると言えなくはない。けれども，執筆を依頼されたこのせっかくの機会に，また退職したのを潮に多少私見を開陳させていただきたく思うので，その点ご容赦お願いしたい。以下に順番を付して述べている内容には特に順序があるのではなく，アト・ランダムの配列であるという性格を有することを最初に断っておきたいと思う。

第1は，教育社会学者を志した観点から回顧したように，如何なる希望や方法をもってアイデンティティを形成するかは大切であるように思われるし，それがどのような契機から開始されたかは個々人に千差万別に生じるであろうから軽々に詮索できないし，実際，種々の事例があり得る。私の場合は，冒頭に縷々述べたごとく恩師との巡り合わせで決定した度合いが実に大きいのであるから，それを事例的に伝授するしか方法がないかもしれない。恩師（新堀）との出会が起きたのは，米国から帰国直後の最初の授業であったし，その千載一遇の機会を見逃さなかった眼力（直観力）を持ち合わせたのだとすれば，それは一生涯のスパンを通して回想してもわれながら幸運であったというほかない。

幸運であったのは，内容的には実は学問を如何に捉えるか，その捉え方を模索中の恩師を目の当たりにしたことであった。新堀は大きいことに着眼して研究を開始すべきと強調し，自分自身の研究もルソーやデュルケームのような教育学や教育社会学の巨人を対象に研究を開始し，その後も教育学や教育社会学の学問的発展に使命感を抱きひたすら貢献したところに本領を発揮したと見做されよう。

私自身はその種の力量を持ち合わせていないが故に，恩師の「暗黙知」の世界を十分理解することは能わないまま徒に人生を過ごした感は否めない。しかし学生時代には彼の近辺にいる時間が長かったのであるから，「門前の小僧習わぬ教を読む」の譬えがあるように，周囲を取り巻く空気を察して教育社会学の構築や高等教育研究への取組みに精進することに次第に邁進したのは確かであり，その中で暗黙知をできるだけ盗んで察知したいと心掛けたのもまた皆無とは言えそうにない。過去から現在までの人生を回顧すると，自分なりに「マートン科学社会学の研究」「学問中心地の研究」といった大きい主題に着眼して研究を開始し「巨人の肩の上に乗って」（アイザック・ニュートン）一歩を踏み出したのは正解であったと言って間違いなかろう。

教育社会学の構築と方法論がいまだ未確立の「根無し草」の時代から教育社会学会自体がその確立を学会上げて取組んでいる最中に，学会に加入して新しい学問の構築に人一倍熱心な新堀の門下で修業を積んだことは，好むと好まざるとにかかわらずいま何が重要かを自分なりに自問自答することになったし，その思いは最近まで一貫して持続したと言って過言ではない。教育社会学の学的確立とその「父親たる社会学」や「母親たる教育学」からの自立の方向を模索した取組みを重視する視点からすれば，自分に科せられた課題としてマートン科学社会学の方法論を援用する方向は，

正論を構成していたと言って間違いなかろう。

第2には，自分が高等教育研究者や教育学者を一生の仕事として使命とし追究するようになるのは，誕生時から決定しているのではない。ある時点で無数に可能性がある中で一人の恩師に出会い，薫陶を受けて次第にその学問＝ディシプリンを専攻し，ディシプルになる過程を辿ったのであるから，宿命性に左右された度合いが大きい。と同時に千載一遇のチャンスを自分なりに生かせた（と思う）のは幸運が作用したのと自分なりの直観力を発揮できたのとのお蔭であろう。その点，出会いまでは「宿命」が作用していたとしても，それ以後はなんとか試行錯誤しながら自力で打開した意味は重いと言えるだろう。

私の場合は，農業に従事することが宿命づけられていたのを，中学や高校の恩師がそれを超克する方向を導き，結果的に自力でもって宿命を打破して「運命」に変換したのであるから，何か「神の見えざる手」とか摩訶不思議な力によって采配され導かれたのではないかと思わざるを得ない。したがって専攻選びの際に自分の決断が正鵠を射ていたか否かは自分では分からない，分からないが決断した以上はその専攻に精進するのが何よりも重要性を増すのに加えて，精進の積み重ねが成果を上げるという慣性の法則がはたらく。その点，40年50年と同じ専攻を持続して，過去を顧みると自分の前に道らしき道がなかった領域でも自分が追究した新たな領域の後には多少なりとも道がついていることは否定できない。その意味では，大なり小なり見様見真似でもって大学教授職や学問中心地など逸早く手掛けた研究を持続的に暗中模索的に全力投球している間に，「予言の自己実現」によってそれなりの成果を上げたと言えるのではなかろうか。

第3に，失敗するのは人間の常であるから，失敗から教訓を学んで次の成長発達のための糧にする意気込みが欠かせない。私の場合は，結構失敗してきたが，何とかそれを足場にして失敗を成功に導くべく次のステップに接続したのではないか。失敗しそうな時点でも最善を尽くして，しかる後に天命を待つのは価値ある打開策である。例えば，米国留学から帰国した時点で，先生から学位取得の準備をするようにサインが出た（らしい）が読み落としていて，後悔した一件がある。先生が定年退職時に5人に博士号を授与した中の一人に私が含まれたのは，今思えば綱渡りの結果であった。その点，私の先輩は綱渡りをする時間すら捻出できず学位取得へのエントリーを棒に振った不本意な結末を想い出す。

私もその運命に見舞われるところを挽回するために，提出日から逆算して毎日少なくとも3枚以上原稿を書く作業をノルマとした。当時は京大へ遠路はるばる非常勤に通い毎週まるまる一日を費やしていたし，他に用事が山積していた時期でやりくりに苦労した覚えがある。累積して1,000枚程度の論文を手書きし，それを荊妻が逐次清書するといういわば家内制手工業を地で行ったのであるが，原稿を清書して作成した学位論文1部を国会図書館に提出する課題をクリアするには，まずは清書が行く手に立ちはだかる関門であった。しかも書き損じや訂正をすぐ清書しなおすには，身近な書き手以外は頼めないという切羽詰まった事情があった。当時はコピー機はあってもPCもワープロもなく，手書きを余儀なくされた制約の中にあって，手書き1部とコピー3部の合計4部をセットにして提出することが義務づけられていたのであるから，その作業を欠如したらお手上げの状態に陥るのは必定であった。ちょうど次男が誕生してよちよち歩きの一つ手前の這いまわる時期

であったのが幸いして清書が辛うじて可能であったのであるが，もう少し後だと間違いなく万事休すであった。

もし帰国時にサインを見落としていなければ，時間的余裕が十分あったはずだが，何故かうっかり見落としたために，結果的には何とか綱渡りで乗り切ったものの，われながら不細工な結末を招いた。人生にはできれば余裕あるペース配分が必要であるけれども，口で言うほど簡単ではなく，実際にはそれを失敗したときに，災いを福に転ずる方法を発見しなければ覆水盆に返らずに終わるしかない。

第4に，私は第1次新渡戸フェローに選ばれたのを機縁にして，イェール大学客員研究員，大学教授職国際調査の日本代表，シュプリンガー社大学教授職シリーズ共同編集長，世界6カ国教育プロジェクト日本代表，ユネスコ世界科学委員会委員及びアジア太平洋地域議長，HERA 代表，等々の国際交流活動に細々とではあるが参画した経験を有する。その間，バートン・クラークを皮切りに，順序不同に並べると，ロバート・マートン，マーチン・トロウ，アーネスト・ボイヤー，ガイ・ニーヴ，ファン・フークト，ハロルド・パーキン，藩悉元，フィリップ・アルトバック，ウルリッヒ・タイヒラー，ウィリアム・カミングス，ロジャー・ガイガー，ダニエル・レヴィ，ピーター・マーセン，デヴィド・ディル，バーバラ・ケーム，パトリシア・ガンポート，クリステン・ムセリン，サイモン・マージンソン，ゲリー・ポスティグリオン，ティモ・アーレバーラ，マーティン・フィンケルステイン，ジュン・シン，等々の名立たる研究者と大なり小なり交流を深めることができたのは望外の幸せである。

第5に，最初は宿命から出発しても，それを運命に転換したように，自力で行く手に立ちはだかる壁を打破する努力を持続すれば，運不運はあるとしても，自から光明が見えてくのではなかろうか。すぐ見えてこなくても，蓋しマージナルな立場に身を置いても，持久戦を覚悟して耐え忍びながら，あくまで矜持を保持することに撤して自分が全うすべき本道を見失わずに「待てば海路の日和あり」と念じて待てば早晩，本懐を遂げられるに違いない。仮に本懐が遂げられなくても，短期ではなく中長期のビジョンを標榜して，自暴自棄にならずに臥薪嘗胆して起死回生を俟つのは決して敗北ではないのである。万一失敗に終始してもそれはそれで力不足なのであるから止むを得ないと腹を括ればよい。巨視的に見れば「人間万事塞翁が馬」なのである。

私の場合は，失敗した事例もあるし失敗が成功に転じた事例もある。旧帝大（京大）への任用人事は敗北しただけで成功を呼び込まなかった事例であるから，失敗が成功を呼び込むとは限らない見本である。広大の修士課程ではマージナル・マンに徹しやがて所期の目標へ回帰した時点においてはそれまでの辛い経験が生かされて起死回生を果たした経緯があるし，また卑怯な騙し討ち人事に直面した場合にも禍を福に転じるべく創意工夫してなんとか成功へ漕ぎつけた経緯があるし，はたまた本山の講座任用人事で生じた不運な結果は後に新講座任用人事での成功へと帰結した，といった事例を想起すると，長い目で見た場合にはおおむね紆余曲折的には成功を招いたと言えよう。大教大の昇任人事でも同様のメカニズムが作用して結果的に禍が福へと好転した事例と言えないことはない。助教授昇任人事では折しも教授昇任適齢期にあたる同年齢の2人の候補のうち業績不足を自覚した1人が業績の多いライバルを道ずれに人事内規の見直しを画策するという奇策を弄

したために，同じ内規を適用する助教授人事も道ずれ的に巻き込まれることになり，結局，私の場合は半年延期されて4月1日ではなく10月16日という奇妙な月日に昇任が行われた。しかし，この前例が役立って8年後の教授昇任時は私が助教授人事で延ばされたのを不当且つ気の毒とする意見に支援されて，教授人事では早いのがよいとは限らないが教室内で一番早い42歳での昇任が反対なく実現する運びになったのである。

京大人事で助教授任用が実現しなかったものの，広大において自分の学問を追究した結果，21世紀 COE のコンペティションの時（2002年）に拠点リーダーとして応募した人文科学の高等教育研究部門のプロジェクトでは図らずもナンバーワン且つオンリーワンとして採択の栄誉に浴したのは画期的なことであったと言える。京大の比較教育学講座に就職していたらその種の応募は不可能だから奏功せず，広大の高等教育研究のセンターに就職したからこそ奏功したはずである。この結果は，秋の園遊会（赤坂御苑）（2003年），宮中歌会始めの儀（皇居）（2004年）への各招待，第61回中国文化賞受賞（2004年），センターの地位向上，東大からの門下生引き抜き，などへ連鎖したと見做される。広大ではセンターが広大のためにあるべきだとする年来の「at & for」問題の中の「for Hiroshima University」論が高揚し始めた矢先に，世界のために広大は存するのだとする「at Hiroshima University」論に追い風が吹き，時の学長（牟田泰三）が「Advanced Research Center」なる華やかな名称を冠してオーソライズしたのである。この動きの定着に COE 獲得の快挙は神風のごとく追い風となって連鎖し加勢したことは確かである。自分の門下からその後，東大へ任用されるという朗報が得られたのは，この種の COE 効果と無縁ではあるまい。そのことは，私に引き寄せて恩師の学問の精神を継承して自分の学問をこつこつと追究し続けるスタンスを根気よく維持したことに淵源すると我田引水的に見做せば，自分なりの矜持を大切にしたことのプラスの因果応報を示しているのではないかと愚考している。

最後に上記の第4と関連しているが，国際交流について一言申し添えて擱筆としたい。比較的若手の時期に偶然とはいえ国際交流のネットワークに参画したことが，同様の活動を地道ながら連続的に形成する原点になったと言って過言ではあるまい。新渡戸フェローの使命である「日本からの研究成果を世界へ発信する」という努力目標を付与されたのを契機に，それをその後生涯かけて追究した（というよりも追究せざるを得なかった）精神を愚直ながら大切にするという矜持が曲りなりにも機能したのである。つまり課題を遂行せんとした意欲が少しずつ蓄積して「見える化」して実績をもたらしたのは否めない。現在，日本は国際交流の点では停滞中，あるいはむしろ衰退傾向にあるのではないかと危惧しているので，私の場合の事例はあまり参考にならないはずであるとはいえ，多少なりともご参考に供するとすれば，若手研究者の方々にはできれば私の場合の35歳よりも早い時期から国際交流ネットワークへ参画する活動を構築するとともに，それを通して積極的に国際交流活動に参加して，国・大学・地域・個人の各レベルのグローカル化を是非とも推進していただきたいと祈念している次第である。

（文中　敬称略）